

【研究紹介】

合評会：

ニコ・ベズニエ, スーザン・ブラウネル, トーマス・F・カーター 著,
川島浩平, 石井昌幸, 窪田暁, 松岡秀明 訳
『スポーツ人類学—グローバルゼーションと身体—』共和国, 2020 年

石井 隆憲¹⁾, 川島 浩平²⁾, 石井 昌幸²⁾, 窪田 暁³⁾, 松岡 秀明⁴⁾,
松浪 稔⁵⁾, 松浪 登久馬¹⁾, 田蓑 健太郎⁶⁾, 大沼 義彦⁷⁾,
永木 耕介⁸⁾, ニコ・ベズニエ⁹⁾, 尾川 翔大¹⁰⁾

- 1) 日本体育大学体育スポーツ科学系,
- 2) 早稲田大学,
- 3) 奈良県立大学,
- 4) 前・大阪大学,
- 5) 東海大学,
- 6) 流通経済大学,
- 7) 日本女子大学,
- 8) 法政大学,
- 9) アムステルダム大学,
- 10) 日本体育大学スポーツ危機管理研究所

キーワード：

スポーツ人類学, 身体, グローバリゼーション

合評会概要：

本稿は、2021 年 1 月 9 日の「第 43 回スポーツ文化研究会」で企画された『スポーツ人類学—グローバルゼーションと身体—』の合評会の報告である。本書は、2020 年に川島浩平氏, 石井昌幸氏, 窪田暁氏, 松岡秀明氏により上記のタイトルで翻訳書として刊行された。原書の *The Anthropology of Sport : Bodies, Borders, Biopolitics* は、2018 年にニコ・ベズニエ氏, スーザン・ブラウネル氏, トーマス・F・カーター氏によって著された。

合評会では、訳者の川島浩平氏, 石井昌幸氏, 窪田暁氏, 松岡秀明氏をお迎えし、評者には松浪稔氏, 松浪登久馬氏, 田蓑健太郎氏, 大沼義彦氏, 永木耕介氏にお願いした。さらに、合評会には川島氏のお力添えにより原著者のニコ・ベズニエ氏にもご参加いただいた。

合評会を通して改めて浮かび上がってきたことは、日本のスポーツ人類学の特徴である。こうした意味では、この合評会の記録は、英語圏のスポーツ人類学と日本のスポーツ人類学の対話でもある。

文献

・Niko Besnier, Susan Brownell, and Thomas F. Carter (2018) *The Anthropology of Sport : Bodies, Borders, Biopolitics*. University of California Press:Oakland, California.

・ニコ・ベズニエ, スーザン・ブラウネル, トーマス・F・カーター著：川島浩平, 石井昌幸, 窪田暁, 松岡秀明 訳 (2020) スポーツ人類学—グローバルゼーションと身体—。共和国：東京。

研究会の概要

日 時 : 2021 年 1 月 9 日 (土) 14 : 00 ~ 18 : 00

方 法 : オンライン (ZOOM)

趣旨説明 : 石井隆憲 (日本体育大学)

パネリスト :

川島浩平 (早稲田大学), 石井昌幸 (早稲田大学), 窪田暁 (奈良県立大学), 松岡秀明 (前・大阪大学), 松浪稔 (東海大学), 松浪登久馬 (日本体育大学), 田蓑健太郎 (流通経済大学), 大沼義彦 (日本女子大学), 永木耕介 (法政大学)

ゲ ス ト : ニコ・ベズニエ (アムステルダム大学)

司 会 : 尾川翔大 (日本体育大学)

採録にあたって

- ・採録にあたり, パネリストより文意を損なわない範囲で修正いただいた。
- ・『スポーツ人類学—グローバルゼーションと身体—』からの引用については『『スポーツ人類学』, p.○』と表記する。
- ・合評会の内容を文字に起こすにあたっては, 菅原敬弥氏, 時田瞳氏, 関口雄飛氏, 渡邊瑛人氏, 櫻井勇人氏, 井上雄貴氏, 本田知也氏にご協力いただいた。記して感謝申し上げたい。

本稿の概要

2018年にニコ・ベズニエ、スーザン・ブラウネル、トーマス・F・カーターにより *The Anthropology of Sport : Bodies, Borders, Biopolitics* が上梓された。2019年3月に早稲田大学で開催された日本スポーツ人類学会第30回大会のシンポジウムでは、本書をもとに「スポーツ人類学30年—*The Anthropology of Sport* (2018) をめぐって—」と題するシンポジウムが開催された。このシンポジウムは早稲田大学の石井昌幸、川島浩平、杉山千鶴の各氏の多大なる協力の中、著者のニコ・ベズニエ氏をお迎えすることで成立したものである。当日のシンポジウムは、司会を石井昌幸氏、パネリストを川島浩平氏、窪田暁氏、松岡秀明氏にお願いし、フロアを交えながら本書を多角的に検討するものであった。

しかし、このシンポジウムでは、お決まりの時間の制約もあり、多くの部分で議論を残したままであった。また、その後、*The Anthropology of Sport : Bodies, Borders, Biopolitics* は上記の4氏によって『スポーツ人類学—グローバルゼーションと身体—』として2020年に翻訳された。そこで、「スポーツ文化研究会」に訳者の4氏をお迎えし、合評会を開催した。評者には松浪稔氏、松浪登久馬氏、田簗健太郎氏、大沼義彦氏、永木耕介氏にお願いし、批評をしていただいた。さらに、合評会には川島氏のお力添えにより原著者のニコ・ベズニエ氏にもご参加いただいた。本稿は、この合評会を採録したものである。

ところで、本書で示されている *Anthropology of Sport* という用語は1985年にケンダール・ブランチャードとアリス・タイラー・チェスカによって上梓された *The Anthropology of Sport : An Introduction* がその初出である。「スポーツ人類学」という学問は英語圏で産声を上げ、さらに、1988年に本書は日本のスポーツ人類学を牽引していくことになる寒川恒夫氏によって『スポーツ人類学入門』として翻訳された。その後、ロバート・サンズや、アラン・クラインをはじめとして、*Anthropology of Sport* あるいは *Sport Anthropology* を名乗る研究は蓄積されている。ここに共通するのは、文化現象の一形態としてのスポーツ現象を文化人類学の立場から捉えていこうとする試みであったことである。しかし、英語圏では「スポーツ人類学」という学問分野の制度的基盤は整えられていないままである。そうした意味では *The Anthropology of Sport : Bodies, Borders, Biopolitics* も同様の立ち位置にあるが、その大枠は世界各地のエスノグラフィを活用しながら現代スポーツの「ビッグ・ピクチャー」を提示したものである。そうした面では、スポーツに対する人類学的な従来の理解を更新するものでもある。

いっぽう、*The Anthropology of Sport : Bodies, Borders, Biopolitics* は日本で展開されてきたスポーツ人類学とは趣を異にするものである。日本におけるスポーツ人類学という学問の制度的基盤としては、1988年に日本体育学会に「スポーツ人類学専門分科会」を設置することが承認され、その10年後の1998年には「日本スポーツ人類学会」が設立されており、組織の成立によって独自の学問分野として認知されてきた。このように、日本のスポーツ人類学は、非常に若い学問分野であるが、「スポーツとは何か」という問いを持つという意味で「スポーツ科学 (=スポーツ学)」に特化した学問としても展開している。

以上の流れを踏まえると、『スポーツ人類学—グローバルゼーションと身体—』を取り上げる本合評会の記録は、英語圏のスポーツ人類学と日本のスポーツ人類学の対話であると同時に、日本のスポーツ人類学の特徴を浮き彫りにすることにも寄与するものである。

(尾川翔大, 石井隆憲)

参考文献

・Niko Besnier, Susan Brownell, and Thomas F. Carter (2018) *The Anthropology of Sport : Bodies, Borders, Biopolitics*. University of California Press:Oakland, California.

- ・ニコ・ベズニエ, スーザン・ブラウネル, トーマス・F・カーター : 川島浩平, 石井昌幸, 窪田暁, 松岡秀明 訳 (2020) スポーツ人類学 ―グローバルゼーションと身体―. 共和国 : 東京.
- ・Kendall Blanchard and Alyce Taylor Cheska (1985) *The Anthropology of Sport : An Introduction*. Bergin & Garvey : South Hadley, Massachusetts.
- ・ケンダール・ブランチャード, アリス・タイラー・チェスカ : 大林太良監, 寒川恒夫訳 (1988) スポーツ人類学入門. 大修館書店 : 東京.

趣旨説明

【司会】：では、2 時になりましたので、第 43 回スポーツ文化研究会を始めたいと思います。本日はお集りいただきましてありがとうございます。スポーツ文化研究会幹事の尾川翔大と申します。本日はよろしくお願いします。

最初にスポーツ文化研究会について簡単に説明いたします。本研究会は、主にスポーツを人類学、歴史学、社会学などの立場から研究を進めている方々で構成されています。年に 5~6 回ほど開催しており、毎回、報告者にスポーツに関する様々な報告をしてもらい、それについて意見交換をしています。今回で 43 回目となりました。

そうしたなかで——すでにお持ちの方もいらっしゃると思いますが——昨年〔2020 年〕『スポーツ人類学—グローバルゼーションと身体—』という翻訳書が出版されました。本日は、本書をもとに合評会を企画しました。まず、翻訳者の 1 人である石井昌幸先生にご連絡したところ参加を快諾していただきまして、石井昌幸先生の取り計らいで、翻訳を務められました、川島先生、窪田先生、そして松岡先生にもご参加いただけることになりました。本日はお集まりいただきありがとうございます。また、本日は、翻訳書の原著者であるニコ・ベズニエ先生にもお越しいただいておりますので、後ほどご挨拶いただければと思っております。

それでは、本日のタイムスケジュールと進行方法について説明をさせていただきます。予定時間としては 14 時から 18 時を目安にしておりますが、多少前後するかもしれません。翻訳書は序章とエピローグを除くと 8 章立てになっておりまして、訳者の 4 名の先生方はそれぞれ 2 章ずつ担当されていまして、それと対応する形で 5 名の先生にコメンテーターを依頼し、4 つのセッションを設けました。

1 章と 2 章については松浪稔先生からコメントをいただいて、石井昌幸先生からリプライをいただきます。3 章と 6 章については、田簀先生と松浪登久馬先生にコメントをいただいて、松岡先生からリプライをいただきます。少し休憩を挟みまして、4 章と 5 章については大沼先生よりコメントをいただいて、川島先生にリプライをいただきます。7 章と 8 章については永木先生にコメントをいただいて、窪田先生からリプライをいただくという手順で進めていきたいと思っております。なお、大沼先生につきましては大学業務のため本日は欠席になりましたので、代わりに私〔尾川〕からのコメントになります。また、田簀先生につきましても、急遽、大学業務が入ったとの連絡をいただいております。田簀先生からは事前にコメントをいただいておりますので、それを菅原敬弥さんに代読していただきます。4 つのセッションが終わりましたら、少し時間は短いかもしれませんが、総合討論の時間を設けております。以上のような流れで本日の合評会を進めていく予定です。

では、ベズニエ先生がいらっしゃると思いますので、ご挨拶をいただければと思います。川島先生、お願いしてよろしいでしょうか。

【川島】：Dr.Besnier, would you like to make a speech, please? (ベズニエ先生、簡単にお話いただけますか?)

【ベズニエ】：Thank you very much and can you hear me? (ありがとうございます。聞こえますか?)

【川島】：Yes. (聞こえます。)

【ベズニエ】 Okay, thank you very much and good morning. Here, I'm in a small town in Turkey and good afternoon in Tokyo. I'm very pleased to be part of this meeting. I'm honored that the book is generating a discussion among scholars of sport, and social scientists in Japan. And I see this as potentially the beginning of joint activities that we could organize in the future. Of course, if the world ever goes back to normal.

This morning I was reading in the news that the Olympic Games are again being debated as to whether possible so its future is very uncertain. But if we can be hopeful, we can be optimistic and think of possibilities for joint discussions and joint research across linguistic and national boundaries, I think that this would be a really fantastic opportunity for us to begin dialogues that do not frequently take place because we speak different languages and we are based in different configurations, different institutions. But I think that this could be the beginning of overcoming some of these boundaries. So I will not say much more, other than, thank you very much for inviting me to the meeting. And I will listen in as much as my lack of Japanese allows me and I look forward to adding value and discussion, instead of presentation. Thank you very much.

(ありがとうございます。そして、おはようございます。ここはトルコの小さな町です。東京の皆さんこんにちは。この研究会に参加することができてとても嬉しく思います。この本が日本のスポーツ研究者や社会学者の間で議論を生み出していることを光栄に思います。このことは、私たちが将来組織しうる共同活動の潜在的なきっかけであると私は見えています。もちろん、世界が通常に戻った場合になりますが…。

今朝、〔東京〕オリンピックの開催可否について、その未来が不確定である中での可能性について、再び議論されているというニュースを読みました。しかし、私たちが希望を持ち、楽観的に捉えて、言語や国境を越えた共同活動や共同研究の可能性を考えるとすれば、私たちがさまざまな言語を話し、さまざまな土地や機関に拠点を置いているためにこれまで頻繁には行われてこなかった対話を始めるのに本当に素晴らしい機会になると思います。このような〔言語や国境、所属機関などの〕境界を克服するための始まりかもしれないとも思います。これ以上多くはお話しませんが、今日は私を会議に招待してくれてありがとうございます。私の日本語の理解力でできるだけ耳を傾け、発表の代わりとなる付加価値や議論をできるように楽しみにしています。ありがとうございます。)

【川島】: Thank you very much. (ありがとうございます。)

【川島】: 軽く日本語で要約いたします。「今、トルコにいます。日本の東京の皆さん、今回の機会をありがとうございます。この本がこのようなディスカッションの機会になったことを非常にうれしく思います。新聞によると、東京オリンピックについての議論がまた再燃して、今後世の中がどうなっていくのか、大変不確かな状況ではありますが、こうした機会が言語や国境を越えて今後の共同作業につながるきっかけになることを心から願っています。この機会に参加できることを大変うれしく思っております。私の日本語の力が及ぶ限り、本日はリスナーとして参加したいと思います」とのことでした。では、尾川さんよろしくをお願いします。

【司会】: ありがとうございます。では、次に、本研究会の主宰の石井隆憲先生より趣旨説明をしていただきます。石井隆憲先生、お願いいたします。

【石井(隆)】: 皆様、明けましておめでとうございます。本年もよろしく願いいたします。本日はスポーツ文化研究会にお越しいただきましてありがとうございます。まず、趣旨説明ということですので、少しだけお話しします。ニコ・ベズニエ先生たちが書かれた、*The Anthropology of Sport: Bodies, Borders, Biopolitics* を読みました。スポーツ人類学についての研究がまとまって出てくることはこれまでの数十年来なかったので、楽しみに読んでみました。難しい部分もありましたが、面白く読みました。おそらく、本日の議論の中にも出てくるのではないかと思います。日本でいうと昔の寒川先生の論文が横に広げたものだとすると縦に書いたもの、といった印象を受けました。

そんな中で、たまたま石井昌幸先生や杉山千鶴先生から、「日本スポーツ人類学会で〔本書をもとに〕シンポジウムを開けないか」というお話をいただいたので、そういった機会

があるなら、是非、ということで、2019年3月に開催された日本スポーツ人類学会第20回大会で石井昌幸先生をはじめ、川島先生、窪田先生、松岡先生にご登壇いただきました。こういった本が出版されているということが、おそらく、日本全体のスポーツ人類学に興味を持っている方々のあいだで広がったのではないかと思います。その流れで今回の合評会を開催することができました。

その後、翻訳書が出版されて、改めてこの本を読みました。実は、3回ほど読んだのですが、翻訳がとても良く、非常に読みやすいという印象を受けました。英文では理解が難しかった部分も分かりやすく読むことができました。それは翻訳者の皆様の尽力があつてのものだと思います。改めて日本語で読んでいくと、今までわれわれが接してきたスポーツ人類学とは、その方向性が少し違うところにあるということも感じることができました。非常に面白く、とても多くの情報が含まれている本ですので、私たちが得るものはとても多いのではないかと思います。

一方で、日本との比較をしていくなかで、「日本のスポーツ人類学の特徴とは何か」ということについても改めて考えていく機会になるのではないかと思います。このような合評会を開催する運びとなったわけです。翻訳者の先生方のご協力によって本日このような研究会が開かれることは、本当にありがたいことです。このような機会はなかなかありません。ご参加いただいた先生たちはもとより、本日はベズニエ先生もいらっしゃいますので、多少なりともこの研究会を開催したことの意義が伝わればと思っております。短い時間ではありますが、皆様それぞれに何か思うところはたくさんあると思いますので、たくさんご発言いただければと思っています。私からは以上です。

セッション1

【司会】: はい、ありがとうございます。では、早速セッション1に入っていきたいと思えます。1章と2章は石井昌幸先生が翻訳を担当されていまして、評者は松浪稔先生に依頼しております。では、松浪稔先生よろしくお願ひします。

【松浪 (稔)】: こんにちは。尾川先生よりこの合評会での評者のお話をいただきました。『スポーツ人類学ーグローバルゼーションと身体ー』の第1章と第2章について何かを語れということでしたので、一生懸命読みました。僭越ながらコメントさせていただきます。

自己紹介が遅れましたが、東海大学の松浪稔と申します。大学では「スポーツ史」「スポーツ人類学」「スポーツ文化論」という授業を担当していますので、この分野についてはある程度語らなければならないポジションにいますことになると思いますが、まだまだ勉強不足の点も多々あるかと思ひます。

実は私、今体育館にいます。新型コロナウイルス感染症対策で、本学ではクラブの練習には大学の教員が帯同しなくてははいけないという決まりができたからです。これまでの研究会でしたら、研究会の場所で顔を合わせて、自分の身体を使って様々なコミュニケーションをとっていたのですが、この1年間のコロナ禍の状況は、それ以前の生活を一変させました。今日のこの研究会もリモートで開催されています。だから体育館からの参加も可能になりました。また、リモート会議ならPCが複数台あれば、複数の会議に同時に出席することも可能です。このような少し不思議な状況も生まれていると思ひます。

今日の合評会にあたり、抄録として「これからのスポーツを考えるために」というタイトルで小文を出させていただきました。自分自身の生活だけでなく、スポーツの世界でも、現在のコロナ禍での世の中に対応することに四苦八苦しています。実はこのような状況を生み出している根本となるのが、第1章、第2章に書かれていると思ひます。

今日は、私から気になった点や印象深い点、重要と感じた点などをある程度お話をして、

そのあと、石井昌幸先生に引き取ってもらおうかと思っています。

では、事前に配布した資料を画面で共有させていただきます。本日の資料は、私が関心を持ったところを本書から抜き出しています。私がこの本を読むためのメモとも言えます。

尾川先生からは、第1章「スポーツ、人類学、歴史」と第2章「スポーツ、植民地主義、帝国主義」を、ということでご依頼いただいたのですが、私自身は、いつも「まえがき」と「あとがき」を読んでから本文を読むというスタイルをとっております。だから第1章、第2章について語る前に「日本語版への序文」と「序章」から簡単にコメントさせていただきます。

この『スポーツ人類学』は、「グローバリゼーションと身体」という副題です。「日本語版への序文」では、スポーツ研究、スポーツ人類学研究の意義について、現状をふまえてまとめています。後ほど質問したいのですが、副題の「グローバリゼーションと身体」の「グローバリゼーション」という文言は第1章、第2章には出てこなかったと思います〔だから、第1章、第2章はグローバリゼーションに至る過程を扱っているということです〕。ただし「日本語版への序文」には出てきます。勿論、原文には「日本語版への序文」がありませんが、ここの内容は、日本語版〔または日本の読者（スポーツ人類学者）〕に向けてこの本の読み方を示しているではないでしょうか。以下に重要だと思った部分を引用します。

「スポーツの広がりとは、我々が今日「グローバリゼーション」と呼ぶ現象の先駆けであり、人類学者が二十世紀の最後の二十年間に関心を向けるようになった関係性や流通そのものから成り立っていた」〔『スポーツ人類学』, p.9〕

「スポーツが二十一世紀の人々の生活で重要な役割を果たし、また現代世界の中心的な問題に示唆を与えている」〔『スポーツ人類学』, p.9〕

このような記述があり¹⁾、ここではスポーツ研究、スポーツ人類学研究の意義が述べられています。スポーツ研究、スポーツ人類学研究をとらえて現代社会の諸問題を明らかにすることができるということです。

つぎに、「序章」です。ここで確認しておきたいのは「スポーツの概念」です。

「スポーツと非スポーツを分かつものがいかなる本質的特徴でもなく、むしろ、どのような政治的コンテクストのなかで、どのような基準で、どんな目的のために、誰が決定を下すのかを決める力の差である」〔『スポーツ人類学』, p.21〕

「本書で我々は、たとえば競争性に中心を置くといったような、何をもってスポーツと見なすかの必要条件あるいは十分条件を押し付けることは差し控える。というのも、競争は、世界の多くのスポーツ的な活動においては、より重視される他の要素によって影が薄くなるかもしれないからである」〔『スポーツ人類学』, p.21〕

このようにスポーツと非スポーツを分かつものが本質的特徴ではなく、政治的コンテクストの中で決定される、と述べられています²⁾。また、本書ではスポーツを最広義にとらえる、とも言っています。『スポーツ人類学』という本で、タイトルに「スポーツ」という言葉が入っていますが、本書において「スポーツ」の概念定義はしない。広義な概念での「スポーツ」を扱う、と宣言しています。スポーツかどうかは政治的コンテクストや西洋中心主義的な歴史過程の影響を大きくうけているからだ、ということが明確に書かれています。スポーツはこれまで西洋中心的なレンズを通して見つめられてきたが、そのような前提を疑ってみる必要があるということです。

この本の著者は西洋の人ですが³⁾、これまで〔西洋で〕西洋中心主義的な見方で描かれてきたスポーツ史やスポーツ人類学を、相対化する視点を提示しようとしていると書籍だと思いました。

これまでの日本のスポーツ人類学について、さきほど石井隆憲先生がふれておりました。スポーツ人類学に関する初学者用の書物としては、日本では、『スポーツ人類学入門』⁴⁾や、『教養としてのスポーツ人類学』⁵⁾、『スポーツ人類学』⁶⁾、『よくわかるスポーツ人類学』⁷⁾があげられます。

これらの目次を確認すると、『スポーツ人類学入門』は、1988年出版当時の視点でもあると思うのですが、未開社会に視点の重心がありました。ここからいわゆる「民族スポーツ」へのまなざしの重視〔偏重〕があるのではないかと思います⁸⁾。この民族スポーツを中心とする視点は、『教養としてのスポーツ人類学』にも引き継がれています。民族スポーツ、伝統スポーツ以外の視点をより多く提示したのが『スポーツ人類学』(明和出版)です(たとえば「植民地主義」「文化政策」「ジェンダー」など)。「よくわかるスポーツ人類学」は、民族スポーツへの視点を重視しながら、現在の研究の広がりをフォローしようとする印象があります。

これらをふまえたうえで、本書の目次・構成を確認すると、「スポーツ, 人類学, 歴史」「スポーツ, 植民地主義, 帝国主義」「スポーツ, 健康, 環境」「スポーツ, 階級, 人種, エスニシティ」「スポーツ, セックス, ジェンダー, セクシュアリティ」「スポーツ, 文化パフォーマンス, メガイベント」「スポーツ, ネーション, ナショナリズム」「世界システムにおけるスポーツ」「人類学にとってのスポーツ」となっています。民族スポーツという視点ではなく、現在のスポーツ事象をフィールドとして扱っていることが、この目次・構成からわかると思います。

また、「人類学的なアプローチがスポーツに独自の光を当て、またスポーツに焦点を当てることが人類学における斬新なアイデアに貢献すると考えている。だから我々は本書を、一方でスポーツ人類学というフィールドの状況を批判的に評価することと、もう一方で将来の探求に向けたプログラムのアウトラインを描くこととの間を行き来するものと考えている(下線部引用者、以下同じ)」「『スポーツ人類学』, p.29」とも書かれています。つまり、本書からわれわれは、スポーツ人類学への視点をひろげるという意図を読み取ることができます。同時に今後のスポーツ人類学を見通す試みであるとも理解できます。

ここでひとつ質問があります。本書『スポーツ人類学—グローバリゼーションと身体—』の原書のタイトルは、*The Anthropology of Sport: Bodies, Borders, Biopolitics* ですが、日本語版では副題は「グローバリゼーションと身体」です。「なぜ「身体, 境界, 生・政治(Biopolitics)」ではなくて「グローバリゼーションと身体」というサブタイトルになったのか」というのがひとつめの素朴な疑問になります⁹⁾。

「Bodies, Borders, Biopolitics」というと「三つのB(3B)」で、英語圏では伝わりやすいワードになると思います。しかし、この「Bodies, Borders, Biopolitics」をそのまま日本語にしたのでは、伝わりにくい。特に Biopolitics という言葉は日本語で「生・政治」とすると一般には理解しづらいという印象もあります。とはいえ「生・政治(Biopolitics)」は、著者の意図には大変あっていると思います。

このように考えたうえで、「日本語版への序文」「序章」を読み、第1章「スポーツ, 人類学, 歴史」を読み始めました。

第1章では、「本章はスポーツ人類学の歴史というよりも、スポーツが人類学者の関心をひいた例の概観である」(『スポーツ人類学』, p.33)「スポーツ人類学が明確な理論上の発展を経てきた統合された分野ではなく、むしろ広範な分野のなかで、その都度変わる主要なテーマの風下で書かれたものであった」(『スポーツ人類学』, p.33)と、著者のスポー

ツ人類学への視点が示されています。

それから、「古典人文主義のなかの古代オリンピック」の項で、古代オリンピックをどうとらえてきたのかについて言及しています。

もともと古代オリンピックの歴史は、西洋中心主義的な視点から描かれてきました。著者は、この視点を改めること、西洋中心主義的な視点からの古代オリンピック史を批判、または相対化する視点を提示していると思います¹⁰⁾。そこには「西洋 (オキシデント)」「東洋 (オリエント)」「未開」といった概念の関係を見直す視点があると思いました。

さて、第1章では、私自身の個人的な経験につながるエピソードもありました。少し紹介させていただきます。例えば、ネメア競技祭にスーザン・ブラウネルさんが参加されたお話がありました。実は私も2000年にネメア競技祭に参加しました。私は2000年に国際オリンピックアカデミー (IOA) の大学院生のセッションに参加したのですが、そのプログラムの中にネメア競技祭への参加が含まれており、幸運にも、ネメアのスタジアムの遺跡を疾走する機会を得ました。当時、古代ネメアの遺跡は、スティーブン (ステファン)・ミラー先生 (Stephen G. Miller, UC Berkeley) が発掘、再建に取り組んでおられて、その現場を見学したりしました。また、先生の講義を受ける機会もありました。「なぜ、ネメアの遺跡を再建するのか」、その理由は今も当時もよく理解していないのですが、西洋的な価値観から、ネメアの古代遺跡を復活させるという視点もあったのではないかと思います [西洋の起源としてのギリシア、ネメア遺跡という視点]。このような、「なぜ」という問いかけのなかに「西洋」と「東洋」などの二項対立的な視点を強化しているのではないか」という問題意識が必要だったなと振り返って思います。

さらに「スポーツ史なき民」の項では、「競争をきわめて重視する点が古代ギリシア特有の文化であるという理解は、今日でも主要な古典学者たちに依然として一定程度受け入れられている」 [『スポーツ人類学』, p.40] とあります。西洋の起源 [連続] ではない、非西洋のスポーツ、またはスポーツ研究の存在 [非英語圏] に光をあてようとしていると思います [とはいえ、これが多分に西洋中心的な見方かもしれません]。

この項では、ヴォルフガング・デッカー (Wolfgang Decker) 先生の研究についてもふれています。ヴォルフガング・デッカー先生も、私が2000年のIOAのセッションに参加した際に講師として参加されていました。2000年のIOAセッションには様々な先生が来られていて、講義を受ける機会がありました。IOA国際オリンピックアカデミーの大学院生セッションは、ギリシア、オリンピアのIOAの施設で開催されました。この時はヨーロッパからの参加者が多かったのですが、「非西洋のスポーツについて語る」ということが、ヨーロッパからの参加者にとっては大変新鮮だったような印象を受けています。私は日本人で、もともと非西洋のスポーツの視点を当たり前に持っていましたので、彼らがなぜ非西洋のスポーツに興味を抱くのか、ということについてあまり理解できませんでした。しかしヨーロッパの彼らにとっては、「非西洋のスポーツ」は「なかったもの」または「見えなかったもの」だったのだと思います。ヴォルフガング・デッカー先生の専門は古代エジプトでした¹¹⁾。古代エジプトのスポーツという、非西洋の視点を提示していたわけです。英語圏、または西洋の人たちに向けて英語圏 [西洋] 以外の文化を提示するということは、重要なことなのだと思います。

「ヴィクトリア時代の身体展示」の項は、大変刺激的な文章でした。「ヨーロッパ人がすでに誇りとしてきた遺物に匹敵するようなものが出てきそうな壮大な遺跡を、南北両アメリカ大陸に見つけ出そうとした」 [『スポーツ人類学』, p.41] とあります。

アメリカの人類学者が南北両アメリカ大陸の遺跡を発掘した動機が、アメリカに歴史を求めた、アメリカの [象徴的な] ピラミッドを探したという点です。アメリカ大陸が世界史に登場するのは1492年以降です。それ以前の歴史を求めること、その歴史を西洋の視

点で解釈, 意味付けしようとしていたのではないか, ということに大変興味を持ちました。中南米の遺跡, および「古代スポーツ」「民族スポーツ」は, 西洋またはキリスト教のレンズを通して解釈されてきたということに, 改めて同意したくなりました。

それから「古典学的考古学も, 人類学的考古学も, ともに大衆文化の発展と密接に関わってきた。P・T・バーナムは, 「大衆文化」の元祖であるとしばしば見なされている。彼は, とりたてて高い教育など受けていない大勢の人々を, 少額の入場料を取って楽しませて収益をあげるという, エンターテインメントの商品化を行った」(『スポーツ人類学』, p.42)とあります。私自身は, この文章を読んで心の中で快哉を叫びました。「(日本の) スポーツ人類学は商品として消費の対象とされてきた」という私の考えに重なるからです。人類学者または人類学の発見〔研究〕が, 大衆文化の商品, エンターテインメントとして消費されてきたということです。これは現代社会においても同様です¹²⁾。スポーツの消費なのか, 人類学の消費なのか。石井昌幸先生が事前に送ってくださった文章の中に「民族スポーツは失効したのか」という問いがありました。まさにこの問いにもつながっていると思います¹³⁾¹⁴⁾。

また, 「人類学という分野のまさに始まりから, 人類学者は世界各地で行われているゲームに対して, スポーツに対してよりもはるかに大きな関心を払ってきた。しかしながら, ゲーム研究は長いあいだ道具とルールをカテゴライズする以上のことはほとんどしてこなかった」(『スポーツ人類学』, pp.44-45)との指摘は, これまでのスポーツ人類学の研究手法への批判といえるでしょう。

私自身は, 「ゲーム」の定義について, なかなか明確な答えを持ち合わせていません。本書では「スポーツ」をより広義でとらえる, と表明していますが, 「スポーツ」と「ゲーム」の差異はどのような点なのでしょう。日本語ではどのように差異を明確にするのか? 明確な答えを持ち合わせておりません。このあと, 「遊び」の定義についても言及があります。翻訳語である「スポーツ」「ゲーム」などは, 日本人にとって定義が必要な言葉だと思いますが, 英語を母語とした場合, 自明だとされるような「スポーツ」と「ゲーム」の差異はなんなのでしょう。著者に聞きたいことでもあります。

西洋で生まれた近代スポーツ概念を相対化し, 西洋中心主義的歴史を批判するという視点は, 「ローマ・スポーツ再考」の項にもあらわれています¹⁵⁾。

また, 「遊びの人類学」の項などでは, ホイジンガやカイヨワらを取り上げ, 「遊び」とは何か言及しています。そして, 「スポーツ」と「遊び」の違いを際立てようとしています¹⁶⁾。

そして「スポーツは遊びではないという理解は, それではスポーツとは何か, スポーツを理解するために人類学にはいかなる貢献ができるか, という問いを積み残したままとなっている」(『スポーツ人類学』, p.65)と問題提起しています。

アレン・グットマンは『スポーツと帝国』のなかで, 近代スポーツの特徴のひとつとして「数量化」「記録への固執」を挙げていましたが¹⁷⁾, ここでは「記録というものを, 誰が, なぜ残し, その記録が寄与するのが, 誰の権力関係に対してなのかについて, 我々は, もっと知る必要がある」(『スポーツ人類学』, p.66)と, 記録が権力関係によって生み出されることにふれています〔生・政治〕。そして「「伝統スポーツ」という概念は, 多くのスポーツ研究のなかで, 近代スポーツの世俗的で, 「合理的」で, 現代的な実践と, 伝統スポーツの前近代的で, 「非合理的」な実践とのあいだの時間的な距離を有効な前提とする」(『スポーツ人類学』, p.67)と近代スポーツと伝統スポーツを対比し, その間に時間〔歴史〕が存在すると指摘しています。この場合の伝統スポーツという視点は, 民族スポーツとほぼ同義でしょう。

次に第2章「スポーツ, 植民地主義, 帝国主義」ですが, 大変読みやすいという印象で

した。なぜなら、石井昌幸先生も翻訳に参加されたアレン・グッドマンの『スポーツと帝国』に書かれていた内容と重なる部分が多いからです。

西洋の形而上学は、「文明」と「野蛮」、「伝統」と「近代」、「原始的なもの」と「文明的なもの」などの二項対立を生み出してきました。植民地主義も「自己」と「他者」を明確にし、他者を否定し排除していく、または征服していく行為です¹⁸⁾。つまりそれは、「自己」と「他者」の間、「植民地」と「被植民地」の間に境界がある、境界を明確にするということです。植民地主義も帝国主義も自己を確立するために境界を作り出すことです。ここには境界を明確にするという視点があらわれていて、英語の副題「**Bodies, Borders, Biopolitics**」につながっています。

それから「スポーツが植民地主義と関わるようになるのは十九世紀のことで、それはヨーロッパにおける産業革命と結びついており、逆に産業革命は植民地主義によって可能になった」(『スポーツ人類学』, p.79)とあります。近代スポーツ、産業革命、植民地主義が、ほぼ同時期に誕生し、お互いに影響を与えながら、より巨大な力を帯びるようになったのです。なお、私はここにもうひとつ「メディア(印刷技術、新聞の誕生)」も加えたいと思います。

さらに、植民地主義に関する人類学者またはスポーツ人類学者の貢献についてふれています¹⁹⁾。人類学者は、最初、植民地主義を正当化し、そして今になって相対化する、またはアンチテーゼを提示している、と理解できます。

「国際的スポーツシステムの歴史的起源」の項では、国際的スポーツ組織の形成過程に言及しています。そして「この全システムは、過去二百年にわたる西洋の歴史の産物である」(『スポーツ人類学』, p.87)と喝破しています。

さらに植民地主義がスポーツに及ぼした影響にも言及しています。植民地主義とスポーツの伝播についての視点です²⁰⁾。

植民地を文明化させる手段としてスポーツが伝播します。そのスポーツが、植民地で被植民地の民のアイデンティティを形成する手段にもなります。植民地の権力関係の中でスポーツが作用するのは、スポーツが植民地主義への抵抗の手段にもなるのです。2002年のサッカーワールドカップ日韓大会の開幕戦はフランス対セネガルでした。フランス代表は全員が、フランス以外のプロリーグで活躍していました。いっぽうのセネガル代表は、一人を除いてフランスのリーグ・アンで活躍していました。そして、セネガルは旧宗主国であるフランスを破りました。スポーツ〔サッカー〕の権力関係の中で、植民地主義を打破したわけです。このような例は、南アフリカやニュージーランドのラグビー、インド他の旧イギリスの植民地におけるクリケットなどでも多くみられます。旧宗主国と植民地、支配するものと支配されるもののスポーツを通じたやりとりが権力関係としてあらわれているのです。

この第1章、第2章では、これまでのスポーツ人類学の視点〔学説・考え方〕、スポーツの捉え方について短くまとめられています。そのうえで、いまのスポーツ人類学のパースペクティブについて、展開しています。そして、第1章、第2章の視点を土台にして、第3章以降があると思います。それが「健康、環境」「階級、人種・エスニシティ」「セックス、ジェンダー、セクシュアリティ」「文化パフォーマンス、メガイベント」「ネーション、ナショナリズム」そして「世界システムにおけるスポーツ」という各章のテーマとなっているでしょう。

また、第1章、第2章を通して、現代的な問題点を振り返るにも、「なぜそうなったのか」という歴史的な視点が欠かせないと再確認しました²¹⁾。

「訳者あとがき」では、「これまで顧みたこともない角度を含む、幅広く多角的な視点から、長い歴史的なパースペクティブにおいてスポーツを再考し、その未来を展望する好機

が到来しているといえないだろうか」『スポーツ人類学』, p.471』と、現代のスポーツ（スポーツ研究）の置かれた状況を評価しています。歴史を確認したうえで「スポーツ人類学を通して「いま」をみる」という姿勢が重要だと再認識しました。

とりとめもなくお話しさせていただきましたが、質問をまとめます。

ひとつめは、副題です。なぜ原題とは違った「グローバリゼーションと身体」という副題になったのかということ。それからふたつめは、「スポーツ」と「遊び」の関係の中で「ゲーム」をどうとらえるのか？ ということ。三つめに、本の内容より本の作り方についての質問になりそうですが、表紙について。原著の表紙は、いわゆる民族スポーツのセネガル相撲で、背景にスタンド〔観客席〕があることで民族スポーツが観光化されているとか、ローカルな、その民族に閉じられたものではなくひろがっている、というメッセージを感じました。いっぽうで日本語版は、黒人女性²²⁾が跳躍している写真です。もちろん日本語版の表紙にも別の意味が込められていると思うのですが、なぜこの写真にしたのか、というのが、私自身が興味を持って質問したいことです。

【司会】：松浪稔先生ありがとうございます。松浪先生より 3 つの具体的な質問がございましたし、他にもいくつか論点があったと思います。昌幸先生もここで挙がっているグットマンの『スポーツと帝国』の翻訳もされているので、重なるところもあると思いますが、いかがでしょうか。

【石井（昌）】：はい、石井です。松浪先生、ほんとうに丁寧に読んでいただきまして、ありがとうございます。また、非常に簡にして要を得た的確なまとめをしていただきまして、ありがとうございました。

いくつかご質問をいただいたので、そちらに答えしていこうと思いますけれども。その前に誤訳というか、ミスが二つありまして、お詫びしておきたいと思います。

一つ目は、この本で著者たちが用いた文献に関して。訳書 29 ページの真ん中あたりなんですけど。「……民族誌と文字資料を用いた、中国語、英語、フランス語……」とずっと書いているんですけど、ドイツ語が抜けています。申し訳ありません。

ちなみに、それに関して不思議だな、と思ったことがありまして。もうベズニエさんいらっしゃらないかもしれませんが。ベズニエさんはオランダ人なのに、なぜオランダ語がないのかな、というのがすごく不思議でした。たしか寒川先生なんかもオランダ語の文献を結構引用されていたような気がして、[スポーツ人類学的な]研究があるんじゃないかと思ったんですけど、原著にはオランダ語はなかったと思います。

二つ目は翻訳書の 103 ページなんですけど。これは校正の段階で直したつもりだったんですが、直っていなかったっていうミスです。103 ページの後ろから 5 行目の「オックスフォード大学のオーセンティックなチーム」って書いてあるんですけど、これ原書は「オックスフォード・オーセンティック (the Oxford University Authentic team)」と大文字で書いてあるので、チーム名だと思います。「オックスフォード・オーセンティック」という名前のチームがあったんだと思います。それを「オックスフォード大学のオーセンティックなチーム」となっていて、これも誤訳というか、ミスです。それでちょっとこの 2 点を、まずご紹介だけしておきたいな、と思いました。

それから、翻訳者としての私自身の感想とか、本書を翻訳した際の「思いの丈」みたいなものは、事前に尾川さん経由で配布していただいた私のノート。「ぶっちゃけノート」みたいなやつにひととおりに書いておいたので、そちらご参照いただければ。大体それ以上は言いたいことは特にないので、見ていただければと思います。

それで、松浪先生ご指摘いただいたとおり、私も同じように感じたのですが、本書を最初に手に取った時に、まず第 2 章ですね。これはいまご指摘いただいたとおり、『スポーツと帝国』の続きみたいに感じました。第 1 章も、今まで勉強してきたスポーツ史の復習み

たいな感じで、これだったら訳せるんじゃないかなって感じがしました。あとで考えると、ちょっと安易に考えてしまった面もありますけど。というところで、私としては第1章・第2章は、皆さんもそうだと思うんですけど、割と馴染みがある話が多くて。いま松浪先生がおっしゃったとおり、じつは私も第3章以降は、すごく新たな発見や新しい情報がたくさんあって。逆に第1章・第2章は、まあそんなには詳しく知らなくても大体なんとなく知っているような話だな、という気がして。すごく馴染みやすかったな、っていう印象を持っています。

それで、ご質問内容なんですけど。一つ目は副題なんですけど。これはあとで川島さんにもちょっと補足していただきたいんですけど、表紙の話も合わせてですね。川島さんにも他の訳者さんにも補足していただきたいです。

ちょっと釈明みたいになっちゃうんですけど。一応これ、出版社が出す商品なので、出版社の意向というものもありまして。原著の副題ですね。「身体」はともかくとして、「境界」と「生－政治」。人文系とか社会科学系とかの研究者にとっては、割と馴染みのある言葉だろうと思うんです。「越境する〇〇学」って言ったり。あと、「生－〇〇」ですけど、フーコーの「バイオ〇〇」という言い方ですね。これらは専門家にとっては非常に馴染みのある言葉だと思うんですけど、一般の人には「境界」、「生－〇〇」とか「生－政治」って書いてあったときにパッと何か特定のイメージが湧くかどうか、っていう問題があった。

出版社のほうからも、「あんまり難しい言葉を羅列しないで欲しい」ということはずっと口を酸っぱく言われていました。「多少原文から離れてもいいから、とにかく一般読者が読んでもスッと入ってくるような翻訳と表現に努めて欲しい」と強く言われていました。結局、翻訳は原文に近づけるように努力したんですけど。出版社のほうからは、そこはとにかく留意してくださいってことだったので。

それで「グローバリゼーションと身体」ってあたりの副題であれば、本の内容とそう外れてはいないし。「グローバリゼーション」という言葉は一般的にもよく知られているので、そのようにした、というふうに自分としては理解しています。川島さん、これ何か補足してもらえますか。

【川島】: はい。今のお話で大体私の理解と違わないんですけど、あとがきのところでも少し書いたことがあります。本書の第1章から第8章はちょっと二重構造みたいになっていて、第1章から第6章までが一つの単位、第3章から、おそらく第8章までがもう一つの単位みたいになっていて、それが重なっているように私は読んでいます。それで第1章、第2章で過去、古代からはじまり、第3、4、5、6章を通して現代に入ってくるっていう時系列の流れが一つあります。それから第3章で身体から入って、第5章は地域社会とかコミュニティなど、ローカルなレベルです。第6章でそれがメガイベントでさらに大きくなり、第7章でネーションへ、8章でグローバルへ、となるんですね。それがズームアウトのプロセスだと思うんです。だから松浪先生のコメントでもあったんですけど、小さいところから広いところへ、というズームアウトのプロセスがこの本の強みなんだろうと思います。だから時系列での流れと、ズームアップとアウトというかスケールアップというか、人類学での、本来なら非常に小さいミクロな世界を扱うところの、ミクロなレベルから、グローバルなレベルを扱うところが、本書の方法論的なチャレンジでもあると思うんですね。

それで、この時に先ほど石井(昌)先生が説明したような文脈で、副題をどうするかっていう時に一方の極の身体と、もう一方の極のグローバリゼーションを全面に出すといいのでは、副題としてはですね。それと、原題の言葉の難しさも、やっぱり意識していて、それをそのまま副題にするのはどうか、そして出版社の意向もあり、我々の検討の中でわかりやすいほうがいいだろうということになりました。それと連動してくるのが表紙の話

で、実は原著の表紙もちろん素晴らしいものなのですが、出版社の意向もあり、つまり翻訳した本は、原著の翻訳であると同時に独立した本になるので、独立した本としての独自性を出そう、そのときにどういう表紙がいいか、ってことなんですね。やっぱりグローバルと身体という二つを意識し、身体とグローバル性を出すときに、この女性であり、ちょっと肌の色がダークで、体全体でアスレティズムというか、アスリートを表していて、グローバルを表象しうるということが結びついてできたのがこの表紙だとおもいます。4つくらい候補があった中で、訳者の先生方と検討して結局これに落ち着いたんですけれども、それが出版社の意向とも一致し、結局たどり着いたのがこれであるというようなことです。十分な補足になってないかもしれませんが、一応以上にさせていただきます。

【石井 (昌)】: ありがとうございます。まさにおっしゃったとおりで。この本のひとつの大きな魅力というか、著者が主張してるのが、人類学のフィールドワークのようなミクロな視点と、いっぽうでさっき川島さんがおっしゃったズームアウトとかスケール。なんて言うんでしたっけ。スケールアップじゃなくて……

【川島】: スケールアップです。

【石井 (昌)】: 「ズームアウト」と「スケールアップ」という大きな視野のもとで、ミクロな事象がどこに位置づけるのか、ということ、一種往復しながら見ていくっていうような姿勢が、ひとつのポイントになると思います。たしかに身体っていうのはミクロなもので、いっぽうでグローバリゼーションというマクロなものがあって。そういうふうなニュアンスで、この副題はテクニカルタームみたいなものを避けながら、もとの副題と置き換えたということになります。

表紙もさきほど川島さんから説明していただいたとおりで。出版社が依頼してくれたブックデザイナーが、4案用意してくれたんですが。そこで出た4案について、どれにするかっていうことを訳者で議論しました。ひとつは、「これ、歴史の本に見えるんじゃないか」っていう写真だったので、それはやめようと。ふたつめは、現代の陸上競技で選手が疾走している写真でした。こちらは「ちょっとありきたりすぎないか」っていうことで。もうひとつは、シンクロの女性選手がプールから顔を出して2人並んでいる姿だったんですが、「ちょっとアートすぎる」っていうことで。消去法的に決めました。

とはいえ、最初に写真〔翻訳書表紙に採用されたもの〕を見た時にですね。実際、本になって見たときには、「割とはっきりした画像になったな」って思ったんですけど、最初に見本をみた時は、人種も性別もあまりはっきりわからないような写真に見えました。それで、「属性みたいなものがはっきりわからないアスリートの姿っていうのはいいんじゃないか」っていう議論をして。こういう写真は「セクシャルな観点から見られがちなので問題なんじゃないか」っていう批判も事前に受けましたけれど、編集者と話をして「じゃあ、あえてそれをやってみようか」ということにしました。「こういう写真がセクシャルに見えてしまうってどういうことなんだろう」っていうことも含めて。

原著者のほうからは、ぜひ自分たちが撮影したセネガル相撲の写真〔原書の表紙写真〕を使ってほしい、って話もありましたけど。これは出版社のほうで別の写真を使いたいということだったので、そうしました。表紙については以上です。

最後に「スポーツ」と「ゲーム」の定義という話ですけど。これは、まずは言語のままに訳しているはず。sports をゲームと訳したり、game をスポーツと訳したりは、していないはず。あとは、私はそういう観点で見てなかったんで、厳密には解りません。ですけども、〔原書も〕スポーツとゲームをそれほど厳密に分けてはいないだろうと思うんですが。ゲームって言うときは、スポーツと呼んで良いのか判然としない、古代の娯楽などをゲームと呼んでることが多いかな、というような印象です。

スポーツの定義について最後に補足ですけど。私的な印象では、〔本書の定義は〕とても

「アングロ的」な理解の仕方だな、ということを思いました。この「アングロ的」という言い方が適切かどうかわかりませんが、あくまで私の印象ですが、コモンロー〔慣習法〕とか経験論の世界の考え方だな、と。つまりその、ヨーロッパで言えば、ドイツだとかフランスだとかみたいな原理的な定義をしない。あえてしないで、現象として起きているものを、ざっくり拾ったうえで考えるというようなスタンス。これはたとえば、ここにリチャード・ホルトさんというイギリス・スポーツ史家の *Sport and the British* という本があります²³⁾。1980 年代に出た本ですが、ここでも冒頭で「私はこれから取り上げるスポーツについて、特に定義しない」と言っています。でも、なんだっけな。Catholic approach って呼んでたかな。「カトリック的アプローチを採る」と書いています。それはどういう意味かという、要するに非常に寛容でぼんやりした、境界が曖昧なんだけど曖昧なままで全体をとらえる、みtainな意味だと思います²⁴⁾。

ぼくもこれをちょっとパクらせてもらってではないですけど、スポーツを定義するときに、「その時代その時代の人たちがなんとなくスポーツだと思ってたもの」をスポーツと考える、というふうにしてきました。イギリス・スポーツ史を考えるときに、何をもってスポーツとするか、という定義は時代によっても変わっていついて、それは現在もそれは進行中です。e スポーツがスポーツだっていう人もいれば、スポーツではない、という人もいて。これ、19 世紀の文献を見ても同じような議論があるんですね。「○○はスポーツか？」って議論をしています。「スポーツ」とされるものには常にコアな部分があって、いっぽうで周縁的な部分もありながら、それが時代とともに移り変わっていついて、コアな部分すらも変わっていきます。それが常に起きているので、原理的には特定できない。

だから経験論的に、この時代にはこういったものが大体スポーツという枠に入っていて、周縁部分に位置するものはこれこれだけど、異論のある人もいたりして。それらを大枠で網にかけるような方法を探ろうとする。これはやっぱり、ぼくはなんかすごいアングロっぽい考え方だな、と思っています。経験論的というか、普遍主義に走らないようにして、「実際のところはどうかんだ」、「どうだったんだ」みたいなところから議論を組み立てていく。本書でベズニエさんも、このような姿勢を採っているんじゃないかな、というふう理解しました。一応リプライとしては以上です。

【松浪 (稔)】：ありがとうございます。

【司会】：はい、ありがとうございます。松浪先生よろしいでしょうか。もう一点ほど、1 章と 2 章に関して何かご意見いただければと思いますがいかがでしょうか。では、私から意見をうかがいたいと思っている方もいらっしゃるんですけどよろしいでしょうか。先ほど、松浪先生の論点では、ヨーロッパ中心主義を相対化するという論点もあったと思いますが、本日『スポーツがつくったアジア』²⁵⁾を翻訳されている富田先生がいらっしゃるんですけど、このベズニエ先生の本の中では、戦後のアジアにおいてスポーツが政治的なものとして扱われていくという文脈も入っていましたが、富田先生、お願いできますか。

【富田】：はい、そうですね、先ほど石井先生と松浪先生からもスポーツ史のこれまでの復習みたいなことが出ていたりとか、アレン・グットマンの『『スポーツと帝国』の] 続編というところの話も出てたんですけども、尾川先生の方からも、私がちょっとだけ携わった訳書に関わってアジアというような話がありましたので全体的な話というよりは、アジアと関わってという意味で気になった点について述べさせていただきます。私が携わった訳書は近代スポーツがアジアの中でどう広がっていくかにかなり焦点化されて書かれたもので、本書でも途中、『『スポーツ人類学』の] 第 2 章の 120 ページあたりから GANEFO だったりとか、アジア、アフリカっていうところへん、現代の脱植民地化の過程でっていうようなお話が出てきています。私としてはこの辺の話というのはスポーツの話って以上に政治的な思惑の方が話としては強いのかなっていうふうにも捉えているので、本書を読

んでいて、そのあたり人類学ってようなフィールド、私自身スポーツ人類学、人類学そのものに関してケアができていないところもあるので、いわゆるベタベタな政治であったり、国際政治みたいな部分と、どのようにつながっていくのかちょっと気になりました。

あともう一点、これはアジアとは関係ない点でもあるんですけども、スポーツが伝播していくって話が本書で出てくる中で、実際スポーツは楽しくないとやらないからいくら欧米に留学した学生が現地に戻って、スポーツやるやらないってみたいな話になっても楽しさがないとやらないだろうって、みたいなことが不意に書かれているところは、僕の中で印象的です。そういった部分って意外とというか、歴史としてだとかなり証明するのも難しいから実際その広がった理由云々みたいなところってなかなか迫れないんじゃないかなと思うんですね。なんかそこに人類学としての持ち味があるのかなと考えさせられました。楽しさだったりとか、個人の主体性みたいなところへの踏み込み方っていうところは、普段自分がやっている点とはアプローチの仕方が違うなっていう意味でそういった点も気になったということです。ちょっと、まとまりない話ではありますが。

【司会】：ありがとうございます。今の話の後半部分は『スポーツ人類学』の] 94 ページのところだと思うんですけど、僕もそこはちょっと引っかかったところでした。このグットマンのスポーツの伝播の話で具体的にスポーツを持ち出していく人たちがどういう過程を経てスポーツを伝えているのかっていうのが、歴史で見える部分となかなか見えない部分があり、そこはスポーツ人類学的に具体的なフィールドから描ける可能性がある、そんなところもあるかなと思います。今の点、昌幸先生はいかがでしょうか。

【石井 (昌)】：そうですね。文化史を研究するときに、やっぱこう、「楽しいからやる」という視点はすごく重要だと思いますけどね。たしかに冨田さんがおっしゃっていたとおり、「本当に楽しかったかどうか？」は証明が難しいとは思いますが。でもまあ基本楽しくなかったら、よほど強制でもされない限りはやらないんじゃないか、と思うので。とはいえ、その楽しいことを、いくつかの選択肢の中から選ばざるを得なかったという背景もある、みたいなこと『スポーツ人類学』に] 書いてませんでしたっけ。どっかにそんなことが書いていたような記憶が。

【司会】：はい、『スポーツ人類学』の] 95 ページの後半。

【石井 (昌)】：95 ページの後半でしたっけね。ああここですね。「なぜ彼らはある特定のスポーツを学び、別なものではなかったのか。そもそもなぜ、それがスポーツだったのか。」そういうことで、その選択の幅というのはどのくらいあったのか、ということを言っていて、これはとても重要です。楽しいって言ったって、いろいろな選択肢のなかから自由に選んでるわけではないし。だけど「自国に」持ち帰ってからも実践したってことは、かりに最初強制されたとしても、だんだん好きになったかもしれないっていう。まあその辺が人間の生活の機微というか、面白いなって。文化研究の面白いところだと思うんですけどね、まさにそこが。

そういう意味では、歴史研究ともすごく通じる場所があって。ある領域を超えると、文学になってくるんですよね、やっぱり。人間が生きていう行為そのものなので。そこにはなんか説明がつかない、本人すら説明のつかない矛盾とか葛藤とか、不条理とかがあるわけですよね。そこまで分け入れるかっていうところは、やっぱり歴史学っていうのはどっかで文学の領域に踏み込まざるを得ない、という面もあるし、人類学もそうだと思います。人文系が、社会科学系と一番違うところじゃないかな、と思うんですけど。

【司会】：はい。ありがとうございます。よろしいでしょうか。第1章と第2章につきましては、以上にしたいと思います。

セッション 2

【司会】：では、続きましてセッション 2 に移ります。3 章は松浪登久馬先生、6 章は田簀健太郎先生にご担当いただいております。そして、先ほど少しお伝えしたように田簀先生が本日欠席となりましたので、菅原敬弥さんが代わりに原稿を読み上げるような形になります。まず先に、松浪登久馬先生、そして、菅原さんにコメントしていただきます。その後、松岡先生にリプライいただければと思います。よろしくお願いします。

【松浪（登）】：ただいま紹介に預かりました、松浪の登久馬の方になります。松岡先生、訳者の先生方、本日はお忙しいところご参加いただき誠にありがとうございます。
Mr.Besnier, Thank you for join our meeting. Thank you very much. スポーツ人類学とかスポーツ史、ちょっとふらふらしているような私には荷が重い仕事ではございますけども、松岡先生どうぞご容赦ください。持ち時間も 10 分 15 分と限りがありますので、さっそく始めさせていただきます。

第 1 章に示された第 3 章の要約なんかを眺めながら進めて行こうと思います。第 3 章のタイトルは、「スポーツ、健康、環境」になっています。序章の中で、何をもってスポーツとみなすのかを必要条件あるいは十分条件を押し付けることを控えるということであるとか、これがスポーツだというふうに定義するのではなくて、何でそれがスポーツだというふうに捉えた方が生産的であるのか、といったことなんかを踏まえながら、この健康であるとか環境であるとかいったものを読んでみました。

第 1 章に示されている部分ですけども、ここでは「第 3 章では、スポーツと、健康と、医学との関係を、科学とテクノロジーについての批判的研究からの視点を応用して検討する。ここでは、西洋の生物医療が、普通は誰も疑問を持たないような明確な方法で、国際的スポーツを形作っていること、一方で、運動と健康に関する非西洋の様態が存在することも指摘する。それらは、身体および身体と自然環境との結びつきについて、より包括的なヴィジョンを持つものである。」[『スポーツ人類学』, p.74] と示されています。誰も疑問を持たないような国際的スポーツを形作っているということにつきましては、いわゆる数量化できる、あるいは一元化されているスポーツといったところで、他方で非西洋の様態といったものにつきましては、以下の〔スライド資料の〕中黒点（・）の部分を見ていただければと思います。

・「インドのヨガ、中国で紀元前一六八年に「導引図」に描かれた医学的な体操、あるいはスペイン征服以前のメソアメリカにおけるマヤ帝国やアステカ帝国で行われた球戯を捉える。」[『スポーツ人類学』, p.466]

・「身体、健康と医療、環境を主題として、古くは古代ローマのガレノスの医学から、現代のドーピング問題や遺伝子操作までを取り上げ、人類史二千年を鳥瞰する視点に立つ。」[『スポーツ人類学』, p. 470] ということをしながら、「病理と健康が宿る個人の身体に着眼」[『スポーツ人類学』, p.471] をしている章と認識をしています。

この章に先だった第 2 章のタイトルが「スポーツ、植民地主義、帝国主義」というものになっていまして、第 3 章の中では、植民者の健康を維持しながら、あるいは植民者が帰国して、植民地の病気を持ち込まないといった目的としての「熱帯医学」[『スポーツ人類学』, p.142] といったものの話題がここには関連をしてくるのかなと思いついて読んでいました。あるいは、これに従事していた医師たちは、植民地に先住していた先住民たちの身体的差異なんかに注目をしたといったところが第 4 章、「スポーツ、階級、人種、エスニシティ」といったタイトルに繋がっていくのかなと思ったところです。第 3 章では、最後に「遺伝子強化やハイテク人工装具といった、未来型のスポーツ医学テクノロジーのなかに見られるような生物医療的身体についても論じる」[『スポーツ人類学』, p.74] と締めく

くられていました。

この次のスライドが、この章の中で期待をされていた部分かなと読んでいますけども、「病理と健康をあつかう学問の分離と統合の可能性」『『スポーツ人類学』, p.469』といったものが訳者あとがきの中に盛り込まれていたというところです。第3章の冒頭の部分ですが、近代医学、体育、人類学は、19世紀半ばから終わりにかけてこれらが出現をして、人類の進化、人体測定学といったものを共有する研究方法として持っていましたけども、人類学の中でスポーツ人類学と医療人類学といったものは分野が確立してほぼ無関係になっていくところの中身に、スポーツ人類学が対象とするスポーツといったものが生きていて、ほとんどの場合が健康な身体によって実践されるものとして身体を捉えながら、医療人類学の中では、バイオメディシン、先ほどの生物医療という言葉ですね、先ほど言い忘れましたけど、文中でこれを松岡先生が言い換えていました。それを言うの忘れていました。失礼しました。医療人類学では、病める身体の治療にほぼ完全に焦点をあてている。あるいは健康よりも病気に焦点といったものに当てているということなんかが、完全に無関係になってしまったというところだったと思います。

これに加えて、環境人類学といったものを合わせてこれらが統合されていく可能性の中には、身体文化についてのホリスティックな全体論的な記述の中にスポーツと医学といったことで可能になるのかな、ということが示されながら、それについては、健康な身体と病んでいる身体のローカルな定義に加えて、これらの身体と自然環境及びより大きな世界との関係といったものを含むものでなければならないと表されていました。冒頭に言いました、スポーツを定義づけないようなことであるとか、この中で健康といったものなんかははっきりとした定義をしていないわけですけども、一つだけ定義づけられているようなことが書かれているとすれば、非西洋の伝統は「健康」を特に自然環境の調和の産物として定義をしている、といったことが示されていたと思います。

この章を読んで思うところ、非西洋の健康といったものについて、引き続き取り組んでいく必要があるのかなと思っていて、書評するというよりは、先生が医師であるといったところなんかを期待をしながら聞いてみたいところが一つありまして、例えばホスピスのような、末期患者が入院するような場所では、チャプレンと呼ばれる聖職者らが務めているケースなんかが見られると思います。このホスピスに入る人たちって末期患者ですから、回復度合いというよりも、如何に終末を迎えるかという部分で、健康とは異なる側面かなと思います。ただ、この現象を見たときに量的な医療だとか、投薬であるとか、そういった部分の限界を現場が訴えているようなことなんかを感じたりしました。もしもよければ松岡先生の立場から、私の認識といったものが妥当であるのかであるとか、先生の知見の中で補足できることといったものがあれば教えていただきたいというふうに思っています。

あるいは、他のところで読み込んでいくと身体の内側だけではなくて、自然環境との調和に注目する非西洋の伝統の世界観として、身体を小宇宙と文中の中では捉えています。あるいは、一つの例としては、儒教の世界観の例の中では、不健康な大衆の存在は、政府が健康維持の責務を行っているからということが紹介されていました。健康を個人の努力で獲得するというより、むしろ健康を求めて運動する事は政府に対する反抗として映る。こういった世界観の健康といったものを調査するというようなことなんかも書かれていて、健康を中心に社会を描くことが期待できるような感じで読み進めていました。

こういった広い範囲で健康といったものを見ていく、身体の外側の自然環境と密接な健康の調査といったものは、おそらく四季みたいなものも関係してくると思いますので、長期調査みたいなものが最良なのだろうなというふうに捉えています。ただまあ、日本の〔大学の〕働き方の場合、短期集中の連続ということになりそうな気がしまして、そんな中、

現代なんかでいくと年々世界の距離感が縮まっているであるとか、様々なものが急速に変化・変容するようになっていくというような状況を考えますと、短期集中を複数繰り返している最中に対象社会が著しく変化しそうな問題といったものが危惧されるような気がします。〔短期調査を〕やっている間にどんどん失われてしまって、サルベージ人類学がまた始まるのかな、みたいな印象を持ったところですけども、非西洋の健康を対象にする調査の展望であるとか、お考えを海外でもフィールドワークをされた松岡先生の思うところ、訳本では描けなかった部分をお話いただけたらなと思いました。

最後になりますけども、未来型のスポーツ医学テクノロジーの中にみられる生物医療的な身体についてです。文中では、南アフリカのオスカー・ピストリウスの例なんかが挙がっていて、施設と用具といったものは、パフォーマンス原理によって身体と環境を分ける方向に向かって行きました。身体においてもパフォーマンス原理は働いているわけですけども、何を自然とするかというのがひとつのジレンマなのかなと思います。読み進めていたところでは、現実の行為であるとか、社会的な交渉に伴うジレンマに接することができるのがスポーツ人類学の研究に期待されているところ、そう明言しているような気がしたわけですが、スポーツ医学といったものが身体を物質と捉える側面があるように思っています。この章の中ではわりとホリスティックといった言葉がいくつか出てきていて、身体とか健康というものについて描いていくといったことが、スポーツ医学の身体観みたいなものをひとつ否定して、統合された新たな身体、あるいはこれに関わる健康とか環境といったものの理解を示すことができると捉えるべきなのか、それとも身体というものを相対的に眺め返して一定の解釈といったものをしていくべきなのかといったところはわからなかったなと思ったところでした。早口で大変恐縮なんですけども、私の方のまとめであるとか聞きたいこと、小文でそれをスライドに流していなかったのが大変恐縮なんですけども、以上です。

【司会】：はい。ありがとうございます。続いて、菅原さん、よろしくお願いします。

【菅原】：皆様こんにちは。6章でございますが、田養健太郎先生のご担当でございましたが、本日、急遽会議が入ってしまったということで、欠席されておりますので、僭越ながら私の方から〔事前の資料を〕代読という形をとらせていただきます。よろしくお願いいたします。

第6章は、タイトル通り、スポーツ、文化パフォーマンス、メガイメントについて述べられているが、とりわけ、「スポーツと宗教」を軸に展開されている。

冒頭の部分で、「人類学は、儀礼研究に根差した独自の視点で文化パフォーマンスを百年以上にわたり研究してきた伝統」〔『スポーツ人類学』, p.260〕を持ち、オリンピックやワールドカップといったメガイメントについて行われた研究の主要理論のいくつかは人類学理論からの援用に基づいて分析を行っているが、「こうした研究の一つの限界は、それが経験的というよりも理論的だという点にある」〔『スポーツ人類学』, pp.260-261〕と指摘している。そして、「さらに難しいのは、民族誌的な研究の入口をみつけることである」〔『スポーツ人類学』, p.261〕と人類学理論のさらなる検討について示唆する。

その後、「パフォーマンス論的転回」、「スポーツと宗教」、「層状パフォーマンス理論」、「メガイメント」、「スポーツイベントの生態系」、「テレビ時代へ」、「エクストリームスポーツ」、「メディア・イベント」、「メガイメントとトランスナショナルな公共圏」、「スポーツと贈与経済」、「メガイメントとグローバリゼーション」、「パフォーマンスとしてのスポーツイベント」と続く。

それぞれの項目で注目〔気づかされる〕した点があるが、とりわけ、民族スポーツ以外の国際スポーツ〔オリンピックやワールドカップなど〕を射程においた点については、非常に興味深い。

メガイメントに対する研究方法については、非常に参考になるものの、石井昌幸先生が指摘した通り、調査の濃淡があることについては、より精緻な研究方法の検討が必要になると思われる。私自身、「スポーツ人類学」＝「民族（民俗）スポーツ人類学」ではないとの思いから、韓国サッカーを対象に研究しようと試みたことがあるが、近代スポーツの練習や組織などについては、日本のサッカーと大きな違いをみつけることができなかった〔私自身の力不足と絶対的な調査時間の不足が原因と考えられるが〕からである。

さらに、石井隆憲先生がすでに指摘した通り、「民族スポーツ」とは、研究対象地〔フィールド〕に生きる人々たちが「スポーツ」として認識しているかどうかではなく、研究者が「研究」という名の下に「スポーツ」として認定したものである。しかも、「民族」という定義そのものが、非常に曖昧かつ複雑であるにもかかわらず、近代以降の枠組みである国民国家がベースとなって研究〔調査〕を進めざるを得ない状況にあるといえよう。

なぜなら、研究を行う研究者自身〔我々〕および民族誌を読む人々も現代〔近代の延長あるいは近代を引きずる現代〕に「生きている」からである。別言すれば、我々も時代の制約の中に生きており、「国家」に対しての「民族」という用語以外の適当な用語がなかなか無いと同時に、当該用語を用いて説明することで、多くの人びとに理解してもらえと思われる〔実際には、明確になっていない部分が残るにもかかわらず〕。

実際、日本のスポーツ人類学研究のほとんどが、近代スポーツに対して、民族〔民俗〕スポーツを研究対象にしてきたことは間違いない。

しかし、今回、ベズニエ氏が指摘したように、「スポーツを定義するのではない」姿勢は、閉塞感のあった日本のスポーツ人類学に風穴を開けるものとみることができる。怖がらずに言えば、既存の説明以外の説明を思い切ってチャレンジしても良いのではないかと思えるのである。

したがって、本章のように、民族スポーツだけでなく、メガイメントまでも研究対象にした研究が日本のスポーツ人類学界にも待たれるところである。

加えて、今回の著書は、現地で調査をする「経験」を非常に重要視しながらも、「いま」我々の眼前にある「スポーツ文化」を人類学的手法によって分析できることを示してくれたといえよう。つまり、これまでに提示された人類学の理論について、スポーツを窓口にさまざまな事象に適用〔アップグレードする必要はあるが〕することができる可能性を示してくれたともいえる〔ただし、マリノフスキーとラドクリフ・ブラウン以来のフィールドワークを否定するものではない〕。

現在、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、計画通りどころか、全くフィールドワークもできない状況で、スポーツ人類学はどのような道を進むことができるのかについて考えるきっかけにできればと思う。

最後に2点だけ、もやもやしたものが残っているので、記しておきたい。

1点目は、スポーツ人類学が「スポーツ文化人類学」ではなく、「スポーツ人類学」であり、この「人類学」に「自然人類学」、「考古学」、「言語学」をも含むものと理解するならば、ベズニエ氏らの指摘は多くの示唆を与えてくれるものの、文化人類学以外の分野に深く言及なされていない点はなぜなのか。

2点目は、「スポーツをしてきていない（したことがない）が文化人類学を学び、スポーツを研究対象としている文化人類学者」と「スポーツについて学んできた（あるいは、スポーツを相当経験してきた）スポーツ人類学者」の言説（研究スタンス）に違いはあるのか〔これは、応用科学の寄せ集め、言い換えれば、総合科学としてのスポーツ科学の専門領域全般にかかわる問題であるが〕。違いがあるとすれば、スポーツ人類学の「中心」に位置するのは、一体何になるのか。

漠然であるが、この2点について真摯に向き合うことは、ベズニエ氏らによる今回の著

書に対する反応のひとつになると考える。

以上のようにコメントをいただきました。以上です。

【司会】: ありがとうございます。松浪登久馬先生と菅原さんよりコメントをいただきました。松岡先生よろしく願います。

【松岡】: よろしく願います。今日は貴重な機会を与えていただきまして、大変ありがとうございます。まず、3章の方ですけれども、医学とスポーツの関係を通史的に見ています。さらに特徴があるとすると、最後のところで出てくるような、さっき話に出しましたが、オスカー・ピストリウスは] 南アフリカの選手ですよね、義足の。ああいうところまでいっているというところがあると思います。Anthropology は、元々人間の科学というということです。Anthropology が生まれた頃っていうのは、マリノフスキーとラドクリフ=ブラウンも出ていますけども、フランツ・ボアズみたいな医学や生理学とかそういう領域から入ってくる人もいるし、言語学もあるし、それから社会構造もあるしっていういろんなアプローチがある。もっと広く言えば考古学っていう四つくらいのサブ・ディシプリンみたいなのがあってできたわけです。いま Anthropology って言った場合、どこまで範疇に入れているかっていうのが問題になってきます。現在、日本では、自然人類学 (Physical Anthropology) っていうのは理学部に入っていたりですね、自然人類学っていうのは、京大で有名なチンパンジーとかああいう研究ですね。それからもう一方では、考古学で、考古学も今は他の自然科学、例えば、同位元素分析とかですね、そういういわゆるハードサイエンスなんかと関係がある。

その中で文化人類学なんですけども社会人類学っていうのがイギリスだとすると、アメリカは文化人類学 Cultural Anthropology で、アメリカで Anthropology っていう場合は、これは Cultural っていうような大体のコンセンサスがあるわけですね。そこでこの今の6章の一番最後の方の、あまり文化人類学の中心っていうか核とかっていうのは、考えない方がいいというか。文献学なんかやっている人から言わせると文化人類学ってなんなんだっていうか、なんの拠り所もないねみたいなことを言われることがあるんだけど、逆にそこを強みとするというふうに考えた方がいいんじゃないかと。だから、中核みたいなもの、これが芯だっていうようなことは考えない方がいいんじゃないかと私は思っています。

第3章の方に戻ると、健康と病気ですね。私は医療人類学もやっています。ご指摘いただいたようにホスピスのフィールドワークもやっていたんですけども、医療人類学っていうのは、この本のなかで批判されているように、健康っていうのは棚上げにしていって、いうところが割とあるんですよね。病気の身体だけを扱う。だけど、さっきもご指摘があったように、両方を捉えていくっていうのも医療人類学の重要な役割だと思います。スポーツの方はですね、健康な身体ということに大体なっている。例えば、第3章の一番最後の義足であるとかですね、いわゆるパラリンピックなんかは非常に大変重要なテーマだと思うんですけども、なかなかそういうところは——もちろんやっている人はいるけれども——、手薄になっているっていう傾向はあると思います。

それで、これ見えますでしょうか。Medicine as Culture²⁶⁾っていうアメリカの大学とかイギリスの大学のテキストブックですけども、文字通り文化としての医療ということ。今バイオメディシンってこれは日本の医療人類学の中では生物医学とかそういうふうな感じで訳される、あるいはバイオメディシンと直接カタカナで使われることもありますけども。これが席卷しているわけで、そこの中で考えているっていうのがあるんだけど。私は第3章を読んで、さっきこれは松浪先生が指摘されてましたけども、非西洋での健康とかそういうようなことでホリスティックっていうのは確かによく使われているんだけど、非常に批判的に読めば、——これ後でご意見伺いたいんですけども——、どうもちょっと

エキゾチズムじゃないかなという感じがしないでもないですよ。要するに、ベズニエさんとかこれ書いた人の拠って立っているのは、実際拠って立たざるを得ないのはバイオメディシンなわけです。そういうところから見ると、やっぱりホリスティックな、例えばスリランカの大学なんかでは医学部で、アーユルヴェーダ系の医学と西洋医学系の医学を両方学ぶことができ、どっちかに専門にするにせよ両方学ぶことができるみたいだね。そういうところに対する、バイオメディシンに対するアンチテーゼみたいなものに非常に興味を持たれているというふうな。これはかなり意地悪な読み方ですけども、私はそういうふうに読みました。それから、松浪先生からホスピスのところで質問があったと思うんですけど、もう一回それをお聞かせいただけますか。

【松浪（登）】：このホスピスの部分でチャプレンと呼ばれる聖職者、こういった人達がホスピスで勤めているという現象が、いわゆる投薬であるとか治療ですか、いわゆる量的なもので治療に接するっていう医療の部分からは限界があって、できないことがあってこういう人達がそこに勤めているという認識なのかなという。

【松岡】：はい、それはそうだと思います。日本ではなかなか分かりにくいと思うんですけども、例えばアメリカのホスピスなんかちょっと調べてみると日本とは随分違って、日本じゃまだいわゆる延命治療で、みたいなこともやってはいる。一方アメリカのホスピスっていうのは、これはある意味で神話だとも思うんだけど、アメリカのホスピスにはチューブがないっていうような言われ方があって。要するにアメリカのホスピスってのは本当に延命治療じゃないですよ。だから日本のとは違っているところがある。そういうところで、チャプレン、あるいは最近は仏教の人もありますけども、そういうような人が非常に重要な役割をしているっていうようなことがあって、その辺はずいぶん日本とは違っている。それはアメリカとかヨーロッパなんかの文化の中で見ると非常に当たり前なんだけど、もちろん日本でも最初のホスピスってのはキリスト教系だし、最近では仏教ビハラーみたいなものが出てきていますけれども、まだまだそういう宗教的なケアが流布しているとは言い難いという状況だと思います。

あと一言だけ。例えば LGBT というのは、20～30 年くらい前だったらこれはもう病気だというふうにかテゴライズされていたわけけども、今はそうではなくなっているわけですよ、色んな国で。もちろん今でもそういうふう認識されているところはあるわけけども。だから、非常に相対的なものだというふうに私は思いました。これがとりあえず、3 章についてのお答えということになります。いかがでしょうか。

【松浪（登）】：ありがとうございます。

【松岡】：続けて、6 章の方に足早にいてもよろしいでしょうか。これを拝見していて、個人的に面白いと思ったのが、田簀先生がいらっしゃらないのが残念なんですけども、日本のサッカーと大きな違いを見つけることができなかったっていうのがあります。もしそうだとすると、これはこれで一つの重要な発見じゃないかと思います。調査時間が不足っていうふうなことが書かれていますけども、調査をもうちょっと続けたら、そう思っていたものがどう変わっていったかみたいな、そういうアプローチもあると思うので。それができなければそれができないで、同じだっていうふうに言うのは重要な発見だと私は思いました。

それから、これは方法論の話なんだけど、研究対象としてのメガイベント。人類学でメガイベントを対象とする場合のいくつかの方法が書いてあるけども、理論社会学みたいなやり方ではなく、つまりトップダウンのような感じじゃなくて、結局どこかのフィールド、あるいはいくつかのフィールドに関わる multi-sited ethnography みたいなやり方でもいいと思うんだけど、やっぱり、人類学の基本っていうのは、人と人、研究者と対象の直接的な交流というか交換みたいなものにもとづいていると私は思っています。だから、

いくらメガイベントやっただとしても基本的な枠組みっていうのはそんなに変わらないんじゃないかと思いました。今まではそれこそ 30 年くらい前までは、それこそここに書いてあるような古典的な、30 年かもっと前だね、70 年代 80 年代になってからだから、まあ 40 年くらい前までは、古典的なエスノグラフィーっていうって、特定の地域に例えば 1 年とか 1 年半行って、あたかもそこの人たちのようなことをするっていうそういう方法が絶対的だったんだけど、それがだんだん変わってきて、例えば交易をやっている人がある所から別の所に行って、そこである程度の人に入れ替わりはあるけれども、なんか一つのものを扱ってそれがまた別のところに行って、また戻ってくるみたいな。そういうふうな考え方がかなり変わってきたっていうところがあって、そういう方法はスポーツの人類学なんかでもやっていけるんじゃないかと思います。

それからこの章でちょっと面白かったのは、人類学の中で例えばヴィクター・ターナーなんかのを取り上げていますけど、良くも悪くもトップダウンみたいなところはあるわけです。要するにターナーなんかは祝祭とか巡礼みたいな当時流行した概念を使ってやったわけだけど、これはそういう古典的な民族誌の枠から離れていっているというところをこの本の中で取り上げられているというのは、当然といえば当然かなというふうには思いました。今から見て、もちろん批判できる点ってのは多々あるにせよですね。こんなところでございます。医療人類学とスポーツ人類学っていうのは、なんでこうねじれの位置みたいになってるのかってのは思っているんだけど、しょうがないっていうか、そういうふうになっているっていうのが現状でございます。私からはそんなところですよ。ありがとうございました。

【司会】: はい、ありがとうございます。松浪先生いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

【松浪 (登)】: 大丈夫です。ありがとうございます。

【司会】: 菅原さんはいかがでしょうか。

【菅原】: はい、大丈夫です。

【川島】: 一言よろしいですか。川島です。第 3 章のところ松岡先生がおっしゃったことに基本的に賛成です。要するに医学を「バイオメディシン」あるいは「生物医療」と呼ぶことで、権威というか、中心からずらしていくというか、あらためて健康とかスポーツとかの環境の中に西洋医学を相対的に位置づけようという試みだ、と私は読んでいます。しかしもう一方で、たとえば成田龍一さんがいうように、やっぱり西洋医学がこれだけ強くなったのは、例えば、ペニシリンとかのワクチンが 20 世紀に絶大な効果をあげた、という、それまでできなかったことを乗り越えてきた圧倒的な強さがあったからだ²⁷⁾、みたいなものがあります。今コロナの中において、我々はワクチンを待望しているという現実を、最近、この 1 年間ずっと考えています。それと、メディアを覗いてても、最近の放送は医者が政界とビジネス界を叱りつけているみたいなところがあって、それができるのは、やっぱり根底には命っていうのがあるからだと思うんですよね。なんというか、「生物医療」を相対化するっていうのは非常に重要なんですが、今も、21 世紀のこの時を生きていて、コロナの下にあってですね、ワクチンを待望している自分たちをもう一回見つめ直すときに、どうしてもその中心性を、ある程度譲歩して、認めざるを得ない気持ちを否定できない自分がいます。それが第 3 章読んだあとだったので、第 3 章のメッセージと、今のこの現状が、非常に、ジレンマのようなかたちである、というのが率直な感想です。第 3 章の内容に、ある意味で座布団 1 枚、というような気持ちと、やっぱり松岡先生がおっしゃっているような読み方の中で、西洋医学にも座布団 1 枚、みたいな感じがあります。松岡先生はお医者さんでもいらっしゃるんで、その上に人類学をやるっていうので、ある意味で、自己分裂のようなところもあるのでしょうか。その辺どうなんですか。

【松岡】: いやいや、自己分裂は全然なくて、川島先生が今おっしゃったように、それこそ

最近なんか一人歩きしている「エビデンス」っていう言葉があるけれど、例えば、感染症にしろ何にしろ、当然、西洋医学の力っていうのは圧倒的なわけで、結局私たち日本人は、生まれる時から死ぬ時までバイオメディシンに乗っかっているわけですね。出生証明書や死亡診断書っていう書類的なことから考えても。私はバイオメディシンに基づいて診療をやっていますが、ただそれを全く絶対的なものとはしないで、ある程度相対的に見るっていうことは必要だと思うし。それだからこそ、余談ですけど、エビデンス・ベースド・メディシンに対してナラティブ・ベースド・メディシンみたいなことが言われてきて、日本でも少しそういうこと言っている人もいますけども、まだ全然広まってははいないけど。ただそういう考え方ってのはあるわけで、そこでやっぱり重要なのは、ホリスティックみたいなものを、これは全く私の個人的な考えですけども、もちろん非常に参照することは重要だと思うんだけど、ただそれをエキゾチズムの消費の対象にするのはちょっとどうかなと。この本はそこまではいってないとは思いますが。というふうに思っております。以上です。

【川島】：もう一言だけ言うと、ぜひ西洋医学に、ですね、死と老化、この二つを克服してほしいです。でも、それができない限りは西洋医学も常に限界を生み続けていく、ちょっと極論ですけどね。おそらく老化も死も永遠に克服できないので、そこに、常に、西洋医学の限界を認めなければならない、と思います。だからこそ、ホリスティックですね。その場所が生まれるのかな、というふうにも思います。

【松岡】：それは全くそうだと思います。

【石井 (昌)】：今の議論すごい重要だと思うんです。その今の川島さんの指摘はね。スポーツと絡めるとどう思いますか。つまり、いっぽうでコロナ蔓延によるワクチン待望論で、誰が感染してもおかしくない環境のなかで、「スポーツを止めるな」って言ってみんな「スポーツをやりたい、やりたい」って言うんですね。ぼくも大学行政的にそういうのに関わっているので、とにかく「やらせてくれ」って言われるわけですよ。

いっぽうで、「危ないからやめろ」って言わなきゃいけないのは、それではどの局面からなのかってのは、根拠はあんまりないんですね。そうしたなかで生きなきゃいけない社会っていうのがいっぽうにあって、バイオメディシンによって常に生きることを強いられる。それってなんかすごく矛盾っていうのかな。皮肉だな、と思うんですけど。それが、コロナでその矛盾っていうのが目の前で起きているような気がして。

【川島】：私は、スポーツをちゃんとやったわけではないんですが、やっぱりスポーツって生きる喜びを絶対与えてくれるものなので、それが、すごく生と結びついていると思うんですね。だから、そこにスポーツの意義があり、医学と死という問題と対置されやすい。やっぱりスポーツは、健康、生の側にいますよね。

【石井 (昌)】：だからその、生と死っていうのが本当に二項対立なのか。つまり死のグラデーションの延長上に生があるのか、っていうのがぼくは疑問なんですけど。死と生って、じつは別次元のことなんじゃないか、っていう気もして。

【川島】：ぜひ、そこをもっと教えていただきたい。私は、即答はできないんですけど、何となくグラジュエーションで捉えがちです。だんだん病気になってだんだん死んでいくみたいな。

【石井 (昌)】：死があって、病気があって、健康があって、スポーツがあるみたいなことになっているけど、本当なのかなって気が。

【川島】：これはぜひ皆さんに考えてほしい。ちょっと考えます。すごく大事な点だと思います。

【窪田】：松岡先生がパラリンピックにもう少し注目してもいいのではと指摘され、今、石井昌幸先生が、現状の話と絡めて「スポーツをさせろ」っていう声を背景にした「ワクチ

ン待望論」に触れられていました。このセッションとの関係でいうと、今の社会は健康な身体というものに偏っているのではないかと思うのです。ですから、この『スポーツ人類学』をふまえると、スポーツ人類学の射程はどこに置くべきなのかということになると思います。つまり、現代批判としての学問であるべきではないかということです。人類学は基本的にそのようなスタンスをとっているし、人文科学全般にいえることだと思いますけど。かつての人類学は、西洋と非西洋、文明と野蛮みたいな話が主流だったことからわかるように、近代の相対化を目指す方向性がありましたが、現代のスポーツ人類学が寄り添うべき対象は、松岡先生が指摘されたように正常じゃない、健康じゃない身体という点にシフトしていくことが必要だと思います。そのように考えると、パラリンピックはすごく重要な対象となります。なぜなら、身体と世界というものの多様な関わり合いを描き出すことが、スポーツ人類学の目的のひとつだからです。では、それを具体的な課題として研究者が何をやるのかとなったときに、いろんな国や地域に出かけていって、文化的な身体のカatalogみたいなものを作成してそれを提示するというではないはずですよ。それをしてしまうと、結局は、[松岡先生が] エキゾチズムとおっしゃいましたし、かつてのコロニアリズムというような話になっていくわけです。ですから、これからやらないといけないことは、社会一般に蔓延する身体イメージ、それは健康を希求したり、きれいなものであったり、無臭とかですね、ザラザラしたものがないようなきれいな身体観を対象にしている限りはあまり批判性みたいなものは生まれにくいと思います。もちろん、いろんなアプローチがありますから、今私が言ったのはひとつの身体への向き合い方の例としてこういうものがあるのではないかというふうに考えています。

【石井 (隆)】：一言だけいいですか。今の話、特に窪田先生の話聞いていて、この3章のところでもそうだったんですけども、我々が非常に理解しやすい近代社会以降のある種の近代のプロジェクトって言うても良いかもしれないけども、一律的にこうであるとするような区分の中に人が全部押し込められて、そしてその中で理解していくという、そうした枠組みを提示されているイメージを強く印象として受けたんです。何を言いたいかというと、実は同じ石井でも、僕と昌幸先生は全然違うし、全く体型も違いますし、あるいは思考も違う。そこのところに差異はあるんだけど、でも同じ石井というその枠組みに押し込められる。そういうことが実は学問の世界というか、特に人類学で、すごい単純化して言えば、日本人はこうだからねとか、アメリカ人はこうだねっていうような言い方の中に位置づけられることによって、でも、実はそんなことを言われていても全く異なるような、そうした個人がその中にもものすごくいて、きれいごとでは多様性というけれど、その枠組みの中から抜け出してしまうとまた違った形で見られるけれども、同じ枠組みの中に入っているかどうかで見ていくと、実は同じじゃないっていう。そういうようなことは、現実問題としてすごいたくさんあるんだろうと思うんですね。いわゆる身体とか、さっきの生と死の問題っていうのも、要は一律的な考えの中で、それらを同レベルで同一視して見ていくことによって、生きるとか死ぬとか、あるいはスポーツをするとか、それは確かに身体というものを核にして行われているものだから、もしかすると、同じレベルで同じようなこととして見られるのかもしれないけども、その枠組みを作ること自体、そもそもすでに違う認識というか、連続性をそこに持たせたり、あるいは同一の箱の中に入れてしまうことっていうことに、もしかするとすごく近代的な思考というか、そういうものに絡め取られているんじゃないかっていう、そういう気がすごくしたっていうのは率直な感想です。

だから、逆に言えばパラリンピックっていう話で、こんなこと言い始めたらしょうがないんですけど、パラリンピックによく出てくる話として、パラリンピアンたちがやっているパラリンピックは、いわゆる障がい者のスポーツで、そこから抜け出ると色んな障がい

者たちはたくさんいるけれども、パラリンピックの中でスポーツができる人たちじゃなければパラリンピアンじゃないわけですから、あくまでも別のアスリートという、障がい者でもちょっと違うレベルのアスリートになってしまうみたいだね。うまく言えないんですけど、そういう枠組みを最初から設けてしまっているところを前提にすべてを捉えていこうとすることは、おそらくやらなくてはいけないことであるのはわかるんですけど、そこに絡め取られてしまうような、そうした思考っていうのがすごく強くなってしまいうように感じたっていうのが、議論を聞いていてすごく感じたところなんです。

【司会】: はい、ありがとうございます。いかがでしょうか。今、セッション2のところでは、松岡先生からリプライいただいた後、いろいろなところに話が膨らみつつワクチン待望の話とかは、現在色んなところで話が出されていると思いますが、スポーツに寄せた話でも身体論とかパラリンピックの話とかにも広がっていくのかなと思います。ひとまず、このセッション2の方は以上でよろしいでしょうか。

【松岡】: はい、ありがとうございました。

【司会】: ありがとうございます。

セッション3

【司会】: ではセッション3に移りたいと思います。皆様よろしいでしょうか。

セッション3は、4章と5章です。大沼先生にご担当ということでお願いしてまいし、事前に長編の書評を寄せていただきました。ただ、大沼先生は今日出席できないということで「代わりに何か付け足しながら話をしておいてください」ということで承りましたので、[大沼先生の事前の書評に基づいて]私の方で時間に収まるような形でまとめておりますので、それに基づいて進めて行こうと思います。

論点は4つに分けています。最初は少し大きめな話です。まず大沼先生はスポーツ社会学に従事されていて、そこから距離をとりながら話ができたとおっしゃっていました。大沼先生は以前、スポーツ社会学の教科書であるドネリーとコークリーの翻訳本に携わっていて、その日本語名は『現代スポーツの社会学』²⁸⁾という本です。そこで訳書のタイトルは「スポーツの社会学(Sociology of Sport)」なのか、「スポーツ社会学(Sport Sociology)」なのかということを議論していたそうです。

今回のベズニエ先生たちの本も *The Anthropology of Sport* で of 入っています。そういうわけで、「スポーツの人類学 (Anthropology of Sport)」なのか、それとも「スポーツ人類学 (Sport Anthropology)」なのかということが問われるのではないかと思います。多くの方は、ベズニエさんたちの本を読んでもとおそらく[タイトルの通り]「スポーツの人類学」の本と読めるのかなと思います。

このベズニエ先生たちの本を読んで、これを社会学の側から[距離をとって]考えたときには民族誌が豊富に活用されているというのが一つの特徴のようです。それは、具体的には「等身大のスポーツ」だったりとか、表現というところで「現地語の使用」とかで、リアリティーが正確に伝わるような訳語、という指摘でした。それから、『スポーツ人類学』では、対象とする場所がスポーツ社会学の対象とする場所とは違って、とても広く取られているところも特徴かなと思います。

それから、スポーツ社会学の関心については、最近のスポーツ社会学の教科書を参照してみますと、「一般的に、近代スポーツの特徴に関する共有された学問的理解のもとで生じた」²⁹⁾とされています。ここでは、スポーツ社会学で扱うものの多くが近代スポーツだということを示されているかなと思います。また、同じ本では「エスノグラフィックな調査は社会学内の多くのオルタナティブな方法的アプローチの一つであるが、人類学のフィ

ールドワークはその学問のエートスの不可欠な位相を占め続けている」³⁰⁾とも書かれていました。こうした〔人類学的な〕フィールドワークの重要性がスポーツ社会学から距離をとったときに、ポイントとして出てくるところかなと思います。

2つ目として、第4章は「スポーツ、階級、人種、エスニシティ」というタイトルです。ここではスポーツにおける「人種問題」が今後どうなっていくのを占うところもあると思うのですが、去年の『現代思想』の2020年10月に刊行されたもので、特集で人種をテーマにするものがありました³¹⁾。こうした本を生み出す契機がアメリカ国内であったというのは皆さんご存じだと思いますし、スポーツ雑誌の『現代スポーツ評論』の中でも少し前に「スポーツと人種問題」という特集テーマが扱われていました³²⁾。

そのような中で、川島先生が『人種とスポーツ』で書かれていた言葉をここで引っ張ってきています。実は川島先生の本を私が修士1年の時によくご存じの星野君とか松下君と一緒に読書会で集まったときに、次の文章がすごく印象に残った、というところをみんなで共有しておりました。読み上げます。「スポーツでの有利不利とは、競技が誕生してから今日までの歴史的な過程のなかにある。それは、第一に競技の特徴や規則、第二に競技者個人の素質、才能、精神力および運、第三に指導者と競技者、そしてプレイを観戦し、視聴する一般の人びとによって培われた競技に対する見方、期待、価値観、こうしたものが相互的、総合的に作用するなかで決定されるものである。また、このなかでつくり出されるものが、スポーツの歴史であり文化といえるものではないだろうか」³³⁾。こうした言葉が川島先生のご著書のなかで非常に印象に残ったところでした。

次に大沼先生の事前の書評の部分に入って、「今日なお、特定の人種集団が特定のスポーツに、とくに高いレベルで集中しているのはなぜかを説明しようとする専門家がいて、人種集団が特定のスポーツで有利に働くとされる遺伝的、生理学的な属性（たとえば筋肉構造、身長、筋肉運動の協調）を持つのでは、と憶測している。しかし、こうした主張はつねに反事実的、論理的な暗礁に乗り上げる」[『スポーツ人類学』, p.198]。人種が歴史的、社会的、政治的に重要なのは、それが奴隷制度から人種差別まで深刻な社会的不平等を正当化する文化的構築物として〔政治的にも〕利用されてきたからである。それは歴史的であると同時に、現代的でもある。果たして現実の社会は「脱人種化 (de-racialization)」に向かっているのだろうか。こうしたところが、大沼先生からの問いかけの一つとして事前の書評の中には示されておりました。

また、4章のところについては、〔大沼先生より〕次のような指摘もありました。最後は以下の言葉で締め括られる。「いずれにせよスポーツは、社会的な不平等の構築における根本的な過程を観察し分析するうえで、豊かな成果を約束する研究分野であるといえるだろう」[『スポーツ人類学』, p.212]。「観察し分析する」という研究者の「ポジショナリティ」は、明示されていないが、単なる観察者を越えた地点にあることだけは確かである。それも本書の魅力である、というのもありました。

おそらくこうしたスポーツの世界における社会的な不平等というものを社会学的に問題化しようとする、次のところが注目すべき点ではないかなと考えました。社会学の見方からすれば、社会的な位置が異なれば、そこで生きられる日常生活やその経験の内実が異なる、という見方です。そして、おそらく階級とか人種とかエスニシティとかというようなところを問題化する時には、次の言葉というのは示唆的かなと考えました。「もっとも個人的なものなかに、もっとも強い社会的な力が働いていることを描かなければならない。例外、個人差、多様性、固有性といったもののなかに、ある特定の学歴、特定の階層、特定のジェンダー、特定の民族などに割り振られた、社会的な力が働いているのである」³⁴⁾。こうした人種とか階級とかを問題化しようとする時には、こうした社会的なカテゴリーが問題化される、と思うのでこうした人たちの声に耳を傾けると見えてくるものがあり、そ

して、もう一つ踏み込んでいうと、「苦しい立場に置かれた人に、社会の矛盾は集中的に押し掛かる。だから、そうした人びとこそが、一番、社会を見抜いている」³⁵⁾と。こうしたところが、社会学の見方ではないかと思います。

3 つ目として、5 章のところでは、階級、格差を問題にした時にスポーツの中で格差とか、社会的不平等が強化される面と緩和される面が提示されていると思います。

この点に関しては、以前川島先生がスポーツ人類学会〔第 20 回大会〕のシンポジウムで問題として提起されていた³⁶⁾と思うのですが、わりとベズニエ先生たちの本では社会的不平等が強化される方に力点を置いているということでした。後でその反対側の論点も出ていきます。それは近代スポーツの内側から近代スポーツの前提を揺らがせる可能性というようなところですね。参考として、『現代スポーツ評論』という雑誌にも「女性スポーツの現在」という特集が組まれていました³⁷⁾。

次に、大沼先生の事前の書評からです。「二十世紀末から二十一世紀初頭にかけて発達した性別検査の科学は、あらゆる人間をきっちりと男女に分類するような生物学的指標が、一つも存在しないことを証明した」〔『スポーツ人類学』, p.217〕のである。このように、生物学的に構築されてきた性差なるものが、あるいはその前提が大きく揺らいでしまっているのが現代である。それでもなお、スポーツは男女に分けられプレイされる。スポーツにおいて厳密に男女を分ける境界線をどこまで引くことができるのか。スポーツに目を向けることで、性差が抱える現代的課題が浮かびあがってくる。

もう一つ大沼先生の事前の書評から引用します。スポーツの人類学がジェンダーに着目するのは、男性と女性が文化的社会的に構築されるからであった。スポーツは社会全体のセクスイジェンダーシステムを反映するに過ぎないのかもしれない。しかしその一方で、スポーツの中で新たなセックスやジェンダーの規範、境界が創られていく可能性もまた残されている。こんなことも書かれていました。

具体的な事例を挙げてみます。例えばフィギュアスケートのペアの多くは、よく目にするところでは力強い男性スケーターと小さな女性スケーターのペアであり、それはリフトの場面で表れてくると思います。時々エキシビジョンなどで女性が男性をリフトしていたりしますが、そこには男性と女性というような役割が見て取れると思います。一方のゲイゲームズでは、男性同士あるいは女性同士のペアという形式でフィギュアスケートが行われる。そうした場面もあります。そうしたものは、フィギュアスケートの男女の役割の揺れを示しているということもあるのではないかと思います。

もうひとつは性を変えたアスリートです³⁸⁾。〔『よくわかるスポーツとジェンダー』を参照してみますと〕ここではテニスのレニー・リチャーズ、ゴルフのミアン・バガー、総合格闘技のファロン・フォックス、競艇の安藤大將、トライアスロンのクリス・モージャーといった方々の名前が挙げられます。ここで挙げた選手たちは性別を変えた選手たちです。ここではおそらく、肉体の力強さが前景化されてきます。この点で反響が大きかったのは総合格闘技の選手の男性だったそうです。元々備わっている筋肉量が違うのではないかとというようなところで大きな反響があったようです。

4 つ目として、再び大沼先生の事前の書評からです。第 4 章、第 5 章を通じて、自然科学的な知見が豊富に援用されている点も指摘しておきたい。人種や民族の識別には、生物学や科学的根拠が利用されてきた。セックスやジェンダーも同様である。しかし今日、こうした自然科学、特に遺伝子工学の目覚ましい進展は、人間や生物そのものへの認識を変えつつある。遺伝子ドーピングと遺伝子の突然変異はどこまで区別可能なのか、誰も答えることができない事態が生じてきている。2020 年ノーベル化学賞を受賞したジェニファー・ダウドナは、「もともと私たち人間の細胞は全身では毎秒百万個の変異が起こっている」³⁹⁾と述べている。こうした現代のテクノロジーと人類との関係が大きく問われる中で、ス

ポーツもまたそれに無縁ではないことを本書は教えてくれる。という指摘がありました。

スポーツ選手は科学技術の最先端にいる。そうしたことはベズニエ先生たちの本でも指摘されていたと思います。選手に使われている科学技術は、ほかのところへの転用可能性を秘めているのではないかと思います。[スポーツをすることができる] 平和な場所にいる選手に使われている科学技術は、他の場面に使われる可能性があると思います。例えば戦争に転用可能性があるものが多く使われているのかなと。こうした最先端の科学技術やテクノロジーとスポーツ選手が、人類学の研究対象であることは、あまり現実的なところではない面もあるように思いますが、[例えば] JISS でどんな選手に、どのようなことが行われているのかを人類学的にそこに参加しながら描くというのは「テクノロジーのスポーツ人類学」として] 可能かもしれない。もちろん、JISS はいろいろな制限があつてなかなか難しいと思いますが、体育学部とかスポーツ科学部がある大学では、実験室に人類学者が入ってそこでスポーツ選手と共同して研究して、そこでやっていること、どんなことをしているのかを描くことはできるのではないかなと思っています。

もう一点としましては、[4・5 章で] 生物学的知見が豊富に引用されていることと関連すると、人類学がもともと自然人類学と深い関係性があつたという意味で可能性を感じさせるなと思います。スポーツ人類学の中で自然人類学の使用感を使いながらスポーツ人類学することはいくらか難しさがあるので、現状では文化人類学や社会人類学の理論とか概念とか、そうした枠組みを使いながら進めているのが現状かなと思っています。自然科学的な知見を取り入れながらスポーツ人類学を考えみると、文化の問題は文化人類学が探究するものですが、ただ、文化の話だけでは終わらないスポーツ人類学、自然科学的な研究と共同する研究成果としてスポーツ人類学を進めることができるのではないかなと思ったりします。

簡単なお話になりましたが、以前川島先生はスポーツ人類学会の時は社会的不平等が強化されるのか、それとも緩和されるのかと問いかけていたと思いますが、そういうところの話も少しうかがうことができればと思っています。以上です。

【川島】: どうもありがとうございます。細かい点までよく覚えて下さっていて、本当に感謝しています。本日はこの機会をいただきまして本当に感謝いたします。大沼先生から、かなり長い書評をいただいて、それにコメントするかたちでメモをしたので、それを見ながら共有させていただきます。よろしいでしょうか。それで尾川先生がまとめてくれた書評にもかなり答えられると思いますので。取りこぼしたところはまた後でフォローします。

それでは一番初めに、「スポーツの人類学」と「スポーツ人類学」、「スポーツの社会学」と「スポーツ社会学」、これをこんなふうにコメントで書きました。

スポーツ史研究ではマーク・ダイヤソンが同様に「スポーツの史学」と「スポーツ史学」を概念化しています⁴⁰⁾。前者が「歴史学からの歴史研究」、後者が「スポーツ科学からの歴史研究」です。本書のタイトルを「スポーツの人類学」とすべきか迷いましたがあえてそうしませんでした。少々表現が柔らかくなりすぎて本書と合わないと思ったからです。私が勝手に思ったことです。この「の」を入れるか入れないかは、あくまでも表現上の問題ですが、英語で言ったとき、「ソシオロジー・オブ・スポーツ」と「スポーツ・ソシオロジー」、「アンソロポロジー・オブ・スポーツ」と「スポーツ・アンソロポロジー」、そして、「ヒストリー・オブ・スポーツ」と「スポーツ・ヒストリー」、いずれも、同じ問題なんですね。土俵がどこでそこに外から何を持ってくるかという図式ができます。スポーツ研究をやっている、そこで歴史学、人類学、社会学を方法論として用いようとするスポーツ・アンソロポロジー、スポーツ・ソシオロジー、スポーツ・ヒストリーになるんですね。

おそらくアンソロポロジー、人類学とか歴史学、社会学を土俵にしてそこにスポーツを持ちこむと、逆に「ソシオロジー・オブ、アンソロポロジー・オブ、ヒストリー・オブ・

スポーツ」になるということです。ですからこれら 3 つの社会科学で同じ現象が起きているので、かなり普遍的な問題なのだろうと思います。歴史学については、最近、英語の論文にまとめて出版しようと思ってます。もしできたらどこかで議論する機会があればと思っています。

私の所属してるところは、スポーツ科学学術院ということで、スポーツがコアになって、文理融合型になっていて、ここに 3 年弱おります。石井昌幸さんは長くいらっしゃいますし、皆さんも日本体育大学で体育研究をコアにされて来た方が多いかと思います。やはりスポーツを土俵にして相撲を取らなきゃいけない立場にあるので、スポーツをコアにするという立場からすると、おそらく「スポーツ・アンソロポロジー、ヒストリー、ソシオロジー」というところに拠って立つのではないかと。

私のような「外様」的人間、ディシプリンが違う人が入ってきたときに、そこで見方とかが違っているということをどうするのかなんですよ。あまり長く時間を取るつもりはないんですが、やはりスポーツをコアにしてそれぞれの方法論を使っていく立場が体育学・スポーツ科学だとすると、おそらくそれがスタンダードなんだろうけど、やはりスポーツの概念化が難しいのではないのでしょうか。本書でも言っているように、その定義は非常に難しく、それをいかにコアとしての概念として成立させるかが、かなり難しい。反対に、ヒストリー、アンソロポロジー、ソシオロジーでは、方法論のコアが確立しています。ですから、そっち側の方の人から見るとスポーツをコアにしたときの議論が、どうしても脆弱に見える、弱く見えてしまうという問題があるのではないかなと思います。この本は間違いなくアンソロポロジー・オブ・スポーツで、人類学に立脚してスポーツをレンズとして見ようという立場なので、この点をしっかりと、まず押さえていくことがあるだろうというのが、この第一の点です。

それからその次に、これはもう民族スポーツのところで両石井先生が生産的な大変深い議論をしてくださっています。私もほんとにそこから学ばせていただきました。この本書の観点からいうと、「民族スポーツ」という訳語はあえて用いないようにしています。両石井先生の議論においても、この概念に基づく難しさが問題化されておりますけれども、私もこの議論に、基本的に同意をいたします。「エスニックスports」という訳語をエスニックスportsに当てて「フォックスports」と書かれている場合のみ、「民俗スポーツ」という訳語をあてています。

第 4 章の一つの節題で用いられている二つの概念が、「エスニシティ・イン・スポーツ」と「エスニシティ・スルー・スポーツ」です。あえて訳し分けるなら「スポーツにおけるエスニシティ」と「スポーツを通してのエスニシティ」です。前者は状態を、後者は変化を想定する概念だと思いますが、実際に訳した節題を英語にするなら「エスニシティ・アンド・スポーツ」になります。本来であれば翻訳は、「スポーツにおけるエスニシティとスポーツを通してのエスニシティ」とすべきだったのかもしれませんが。当初はその可能性も考えたのですが、冗長になるので、現在の形「エスニシティとスポーツ」にしました。ここでも、いずれにせよ、主役はエスニシティであってスポーツではない。つまりスポーツをレンズにして見るエスニシティが主役です。

これは先ほども言いましたように、アンソロポロジー・オブ・スポーツというアンソロポロジーであり、コアの概念のエスニシティが主役であるということと、同調するということなんですね。ですからやはり、スポーツをコアとする立場から見ると、エスニシティが主役になっているところに、微妙な違和感というか、距離感を感じるのかもしれませんが。ただ、民族スポーツという概念の難しさは、二人の石井先生から教えていただいたとおりなので、やはり、エスニシティを主役にする方がわかりやすいというか、一貫性のある立場が取れるのではないかなと思いました。

それから人種ですね。これも尾川先生からご指摘がありました。脱人種化に向かっているのかに関してですが、人種という概念は長い間批判的に検討されてきたことは確かですが、それは「人種」あるいは「人種的なもの」がなくなる、消滅するというのではないと思います。例えば、遺伝学者のデビッド・ライクあるいはライヒは、まだグループ間の違いについては調査する価値があるのではないかと疑っている。そしてこの違いが既存の人種カテゴリーと相関する可能性を残したままにしている、と科学ジャーナリストのアンジェラ・サイニーは『科学の人種主義とたたかう』⁴¹⁾という本の中で述べている。アンジェラ・サイニーはイギリスのインド系の、最近非常にヒットしているジャーナリストです。彼女自身がインド系ということもあるのだろーと思います、非常に厳しく人種主義を告発しています。この本の中で多くの科学者にインタビューしています。そこで、人種概念が否定されるのではなく、むしろ息を吹き返していることに対して警鐘を鳴らしているんです。たとえば、アフリカ系アメリカ人の大半が西アフリカ出自の形質をもち、アメリカの白人はヨーロッパの血統であることが多く、どちらも人類の歴史で、少なくとも 7 万年間は部分的に隔てられていた、ということです。

これはライクの議論ですが、西アフリカ人とヨーロッパ人、これら 2 つのグループを隔てていた長い時代があると、進化によって、一定の違いが蓄積するのに十分な時間がある。そうした違いが何を意味するか、多くはわかっていません。また、生物学上の違いがどう作用するのかを集団的に突きとめる試みは始まったばかりだ、と続けています⁴²⁾。

サイニーにはライクを批判する立場に立とうとするが、それをでき切れずにいます。ライクの主張を一言で言うなら、人種を肯定することも、人種を否定することも、いずれも真実ではない、となります。つまり、いずれにも政治性が含まれてしまうから、ということなのだと思います。つまり、人種という概念が過去、特に戦後、文化人類学を中心に批判されてきて、存在しない、科学的に適切ではない、とされていますが、それでも、この概念がなくなっていない、ということが重要なポイントです。

それから、尾川先生のコメントでは言及されませんでした、アイスホッケーのところ、中国、韓国についても書かれているのに、日本の記述がない、これはどうしてか、とありました。ブラウネルは、中国の専門家、中国として韓国について記述しているが、それ以外は不確かだったから、だと思います。ここでの議論は、移民前にすでにスケートをする環境があったという点が重要です。この枠組みから考えるなら、日本も当てはまる、とお答えできると思います。

それから、黒人アスリートのところです。黒人アスリートのところの記述は、原文の記述も、本書でも難解なところで、石井先生に相談して、訳を手伝ってもらいました。しかしそれでも、原文の意味を消化しきれないところがある、というのが率直な気持ちです。それが訳文にも反映されていると思います。先のライクの指摘を受けて言うなら、ここは、人種を否定する立場から書かれていますが、真実でないことを含んでいるために、説得力を欠かざるを得ないのでは、と私は考えます。

これも尾川先生からご指摘いただいたのですが、本書のポジショナリティの問題があります。ここではスポーツの階級の壁を維持する面と、それを破壊する面の、どちらが本当なんだ、みたいな話です。本章は、スポーツの変化を起こす力を、あまり強調していません。それは、これまであまりにもそちらが強調されてきたので、あえて強調していない、ということでもあると思います。この点について、第 4 章の主張は、その通りだと私は思います。ここで、研究者のポジショナリティは明示されていません。

最後まで結論的な声明を避けて、議論を促すという立場になっていると思います。それでも、力点は明らかに、スポーツが社会的な不平等を強化するところにある、ということはい間違いないと思います。ですから結論のところ、すこし論点をずらして「いずれにせよ

スポーツは、社会的な不平等の構築における根本的な過程を観察し分析するうえで、豊かな成果を約束する研究分野である」『スポーツ人類学』, p.212』という主張になり、平易に言い換えるなら「もっと勉強しよう」というような主張になっていますが、全体を通して読むと、著者のポジションは明示されているように、私は感じます。

それからジェンダーのところで、尾川先生からの質問には後で答えますが、私が一番気になっているのは、コンフィギュレーションの話です。西洋の「コンフィギュレーション」、これを「様態」と訳していますが、東アジアでは、特に中国が焦点ですよね。スーザン・ブrouネルは、アメリカ人ですが、中国の専門家として中国について多く書いている。だからこの本の中で中国に関わることは、間違いなくスーザン・ブrouネルが書いています。中国についての様々な記述については、別の研究会です、例えば高嶋航さんからもコメントをいただきました。多分議論の分かれるところだと思います。ここでは中国のスポーツをジェンダー・セクシュアリティから見ていて、そこに見える像は大変興味深く、それはその通りだ、と思います。

ただあえて批判的な立場に立つなら、西洋の様態との比較で非西洋性を論じるために、中国の差異を強調しすぎてはいないか、ということです。日本をフィールドとする日本人研究者が非日本人の日本研究を批判する点として、誇張とか曲解とか偶像化とか、様々ありますが、スーザン・ブrouネルが中国について書いているところにも、あてはまるかもしれません。中国の専門家ではないので断定できませんが、一般的には、西洋にアジアがどう見えているかという視点に立って、ここを読む必要があると思います。例えば日本のところの例を挙げると、コメントではとくに何もありませんでしたが、日本人とフィットネスの話があります。日本人はフィットネスにおいて女性の理想像を足の形と細さに求める、という事例研究を紹介しています。これはブrouネルの指導下にあった博士論文がもとになっているようです。

私は日本のフィットネスをよく知らないのですが、ご存知の方があったら教えてほしいのですが、確かに、足の形と細さへのこだわりがあるということはわかりますが、グローバルにフィットネス運動を見た場合に、それを日本の独特のこだわりといえるかは疑問です。例えばダイエットは、体を細くするとか、美全体に対してより西洋モデルに近くなるとか、そういった目的はあると思います。しかし、それは、ここで言うように、日本で足の形と細さに価値を求める姿勢に特化しているものなのか。私は、若干違和感を覚えたので、問題提起しておきます。

私が書いたメモからは以上です。その他に、尾川先生からいただいたポイントが2点です。1つはトランスジェンダーの問題です。この章を読んでいると、トランスジェンダーという言葉が何回か出てくるのですけれども、エスノグラフィーとか実例を使っただけで論じてないと思います。インターセックスの話はかなりあります。これはジェンダー、セクシュアリティ、あるいはセックスの曖昧さの問題を論じる際に、非常にいい例なのですが、トランスジェンダーは、逆にかなり扱いにくい問題じゃないかなという気がしています。ですからそこへの深い議論がないというのは、おそらく著者の慎重な姿勢の表れかなというふうに読むことができると思います。

科学の問題も、非常に重要なポイントだと思います。私は文理融合型の大学院にいますので、理系の方とも交流があります。その交流は、残念ながら、学術的には困難で、カリキュラムを策定するために一緒に仕事をするくらいがせいぜいです。やっぱりかなり前提が違って、これはおそらく、石井昌幸さんのほうがいろいろ語りたところではないかと思っています。文理が共存していくところに、エキサイティングな面は多々ありますが、なかなか難しい問題でもあります。これは、さきほどの話に戻ると、スポーツ・アンソロポロジーとアンソロポロジー・オブ・スポーツの話にも似ています。やはり、大学院で、若

い柔軟な時にどういう学問で鍛えてきたかということが大切です。そこから少し年取り、老化して、能力が衰えてきてから、新しいものを取り入れようとしても、新旧の学問両方に、同じような力をつけられるかということそうではない。若い頃からその土俵にいた人と比べると、その分野についてはどうしても劣る、というか、そういう経験を通じて、最後のところの、科学の話を聞いていました。自然科学に入っていくことは非常に困難で、人種を調べていたときに立ち止まった分子生物学で、DNA の話になって、そこで学術論文を読んだりしました。しかし 40 代 50 代になってから読んでいくのは大変でした。学部時代から、分子生物学をやっておくべきだったと後悔しました。学問領域を越境してやっていくことの困難さを痛感し、やっぱり原点に戻ろう、みたいな心境から、歴史学に戻ろうとしているのが、私の現況です。能力不足で、そうならざるを得ないのです。

それはさておき、ご指摘いただいたように、人類学者が自然科学の分野に入っていくというのは非常に大きな可能性があると思いますので、できる方にはぜひやってほしいなと思います。早口でいろいろ喋ったので、十分ではないかもしれませんが、以上で私からのリプライとしていただければと思います。どうもありがとうございました。

【司会】：ありがとうございます。

【川島】：どうもありがとうございました。話している時は、自分が書いたものを読むだけだったので、皆さんの反応が全然わかりませんでした。これは、たぶんズーム会議の難点で、聴いているときはすごくいいのですが、話すときは、目隠しをして発表しているような感じで、非常に心細かったのです。とりあえず以上です。どうもありがとうございました。

【司会】：はい、ありがとうございます。今の 4 章と 5 章のところについてはいかがでしょうか。

【石井 (隆)】：石井です。少しよろしいでしょうか。最後にちょっと触れた部分で最近流行りの科学人類学なんかの考え方のようなものもありますが、——尾川君も言っていましたけど——、スポーツそのものを見たときに、どうしてもそういう〔科学の〕影響を避けて通ることは多分できないような気がしています。対象にするものにもよるのでしょうか、例えば、オリンピックのことを問題にしたとして、そこにいるアスリートを対象にすると、トレーニングもあればさまざまな戦略もあればいろんなものがあると思う。そうなってくると、やはり川島先生がおっしゃっていたように、科学的な側面にどこまで踏み込むのか、人種の問題もおそらく同じで、分子生物学のような何かそういうところ、最終的には、もしかしたら本当に細胞の問題とか、遺伝子の問題とか、そういうところまで踏み込まないと実は議論できない問題に最後はなってしまうのかっていうのがちょっと気になるところなんです。そうした細胞の問題が、ある 1 つのエスニックグループを作り上げているんだというところにダイレクトに結びつくような、そういう関係性があるのであればおそらくそうなるでしょう。

でも、それだけで物事が決定するわけでは多分ないはずなので、そうなってくるとその科学的な部分をどこまで追い求めていくのか、さっきの土俵の話とか、あるいは右利き左利きみたいな話でいくと、その両方の腕が同じように使えないといけない、使えればそれに越したことはない。野球のスイッチヒッターみたいなもので、両方で打てればそれに越したことはないという話になるのかもしれない。でもそれも、状況によるような気もする部分もあって、その辺のことについて川島先生はどうお考えですか、というのをちょっとおうかがいしたかった。

【川島】：お答えできるかわからないんですが、個人の、メンタリティーというか、性格と関わってくると思います。たとえば、文理融合型の会話をしたときに、相手が何を言っているかわからないという状況が起こる。そのときに、向こうが言っていることがわからない

という状況で、向こうもこっちが言っていることはわからないという状況でもあるとおもうのですが、それぞれの専門家同士が、共通の土俵をどこに求めるのか、ということではないかと思います。自分の土俵に相手を引き込んでバンバンやる、ということになるのか、あるいは、相手の土俵に入ってそこで議論するのか。私は、基本的に気が弱いので引きずりこむよりは相手のほうに入っていこうとしてしまうというところがあり、その段階ですでに譲りすぎてしまいます。本来であれば、相手も、「専門バカ」という言葉が当てはまるのかわかりませんが、こっちのことをほとんど知らないのです、もう少し、その両者から下がったところからちゃんと見て、ということができればいいんじゃないかと思います。だから、そういうことを踏まえて、どこに立ち位置を置くのかというのが、おそらく問題になってくるんだろうなという気がします。これは、実践も含めてそうだと思います。ですから、最近はやりの人類史とか、あるいは、先ほど引用したジャーナリストのアンジェラ・サイニーなどは、頭の切れるジャーナリストで、なかには素晴らしいアスリートである方もいると思いますが、たぶんどの一つの学問領域にも属さない立場から、どの領域にも距離を置いた立場からものを書いていける、そういう位置があるのかな、という気がします。

少しずつですが、自分は、歴史が院生時代からのバックグラウンドなので、縁あって本書を訳すお手伝いをさせていただきましたが、自分の領域の外側にあまり踏み込まないで、歴史学にとどまっていれば、波風立たない人生を送れるのかなと思うようになったんですね。ただ、読んでいて、面白い本というのはいろんなところがあるので、それゆえに右往左往しながら、未だになんというか、そのために苦悩しているようなこともあります。逆に隆憲先生に、今どうしたらいいのか、ということについて教えていただきたい。いただいた質問をそっくりそのままお返ししたいと思います。すいません。質問に、質問で返してしまっ

【石井 (隆)】: まさかそんな返され方をするとは思ってなくて、ここで終わると思っていたんですけど (笑)。おそらくあと 30 歳ぐらい若かったら多分スポーツのそういう [科学的な] 場面というか、アスリートのそうした場面の中で何かやってみようとか、あるいはもう少し広くいろんなものを自然科学とか、そういうところでも議論できるようにしたほうが面白いだろうなということはずごく感じます。例えば、今の文化人類学の中でも山中教授のラボに入って研究している方もいたりして、ああいう研究の成果を見ているとやっぱりまだまだ人類学の研究ってすごく発展性があるんだなというのをすごく感じるんです。

おそらくスポーツの世界というのは間違いなく単純に文化だけの話で終わるものでもないわけですし、実際にはそこにいる人間が活動している。そういう現場を何らかの形で見ていくということをやっていると思うので、それを考えると何か別の武器と言いますか、昌幸先生風に言えば、別の道具を持って、測定器具がたくさんあればあるほどいろんなものが測定できると思うので、そうしてやっていくと面白いものが見えてくるでしょうし、これはちょっと上手い言い方ではないですけども、文理融合で出来るというのはなんかすごくワクワクします。そういう感じは個人的にはすごくあります。特にスポーツのことを対象にすれば余計にそういう側面があるかなというような気がします。昌幸先生に言われているように技術や技のことを研究しているので、そうするとそういうような側面を理解する上においては、科学的な知見が入ってくれば、それはそれでまた面白いだろうという気がしています。

【川島】: ありがとうございます。私も頑張りたいと思います。

【松岡】: ちょっとよろしいですか。今のお話を聞いて、川島先生がおっしゃっていた最初の段階、例えば大学院段階ではなかなか脱構築しがたいというのはあるんじゃないかと思うんですね。もちろん文理でいろいろやることはできるのだけど、そんな中で非常に素晴らしい成果があるのだろうけど、結局相手のことは分からないようなところがあるので

はないかと個人的に思います。

例えば文化人類学の中での科学研究で、ポール・ラビノウが PCR の研究をやっているところの研究所に行って⁴⁹⁾、自分もその中に入ってやっているわけだけど、それはあくまでそこに一定期間居て、そこから本を書く。そういうスタンスでそんな簡単じゃないように僕はさっきの川島先生の話聞いてやっぱそうかというふうに思ったんですけど、勿論いろいろやることはいいんだけど、やっぱり二つはなかなか簡単ではない気がしましたがいかがでしょう。

【石井 (隆)】: 松岡先生、逆に僕はまずは事実を紹介したいのですが、例えば儀礼研究で自分がシャーマンになってみます、というものがよくあります。そういうようなことをやったときに、本当のシャーマンになれるかという、それはそこまではいなくて、いわゆる「入門編」で終わるとというのがこれまでの人類学の研究だったと思います。その先に行くと、一端のシャーマンになるとか、一端の別の何かになるというようなところまで行き着くような、そういうことをやって何かを書くというようなことをやると、もしかすると今までとは違ったものが見えるのかなというような気もするんですけど、どうなんでしょう。

【松岡】: 私、個人的に知ってる人類学者が、プライバシーがあるのでこの誰とは言えないですが、あるところのシャーマニズムを研究していて本当のシャーマンになってしまったという人がいます。向こうに行ったっきりになってしまったわけです。そうすると文化人類学の方法論に基づいたものは書かないということになるので、その辺は難しい。別の人はあるところに行ったままになったのだけど、結局最終的に戻ってきてそれで大学の研究者になったけど、この人はずいぶん7年くらいむこうで生きていてあるきっかけで元に戻った。その人はそれがなければ、そのままずっとむこうに行っていた感じがある。

非常に古典的な言い方だけれども、パーフェクトスト・レンジャー、つまり一定の期間フィールドにいて、そこで向こう側の人のように振る舞い、帰ってきて結局自分のベースで書くことが一般なので、今石井 (隆) 先生がおっしゃったようにできればいいのだけど、一端のエキスパートになっちゃうとそれは向こうに行っちゃうんじゃないかなというふうに思いますがどうでしょうか。

【石井 (隆)】: わかりました。今までの人類学のところでよく出てくるのがある一定の境界線があって、おそらくその間際まで行くけども向こうまで行かない。結局、向こう側もちょっと見えるけれど、見えたところでまた逆戻りするということをやっているのだと思います。例えば文理融合って言ったときに我々のベースになるディシプリンがあって、それで向こう側まで行くって言っても、やっぱり同じようにいけないのか。この場合は別物として行ってしまえるのか、逆に行ってしまったら元に戻って来れないのか。そこはどんなですかね。

【松岡】: 例えばある研究所に行ってそのまま研究員になったかもしれないし、京大の IPS の人がもしかしたらそっちになっちゃうかもしれないということがあるわけで、どちらがいいかという問題はさておいて。

【石井 (隆)】: わかりました。ありがとうございます。

【司会】: ありがとうございます。いかがでしょうか。ではセッション 3 はこの辺りで閉じてよろしいでしょうか。

【川島】: どうもありがとうございました。〔なお、本合評会に参加するまでの準備活動で、JSPS 科研費 JP17K01694 の助成を受けた。ここに記して感謝する。〕

セッション 4

【司会】: 続きまして、セッション4に移りたいと思います。こちらは7章と8章で窪田先生が翻訳されたところになります。評者は、永木先生にお願いしております。では永木先生お願いします。

【永木】: まず総評としてこの本をあまり深読みできない部分もあったんですけど、フィールドワークとかですね、豊富なデータに基づいて通時的かつ共時的な分析を行っているを読めたので大変人類学的だなと感じるところがあります。興味深かったです。こういうことかなと思ったところは、スポーツ人類学の仕事というのは最終的に現代というダイナミズムにおけるスポーツの諸相や諸問題、それらに対する理解を深めて出来れば解決や改善に寄与する、貢献することにあるということを主張しているのかなというところでした。そういう点では、今後のスポーツ人類学の大きな方向性を示していると感じます。

ただですね、その現代のところに視座を置くということで、先ほどくらいから少し出てますように、特に社会学とのすみ分けというか役割分担というのはどこに求めているのか、それともいかないのか、というそこらへんが引っかかったと言いますか、そういうところがありました。

それでまず私に与えられたのが第7章と8章なんですけども、まず8章の方からですね、「世界システムにおけるスポーツ」というテーマになっていまして、特に窪田先生が『「野球移民」を生みだす人びと—ドミニカ共和国とアメリカにまたがる扶養義務のネットワーク—』⁴⁰を書かれたということがあって、そこに「焦点を」集中させたいと思いました。まず本『スポーツ人類学』の中の「アスリートのトランスナショナルな移動」の部分で、ドミニカ共和国の「野球移民」にも少し触れてあるんですね。そういう関連から、例えば『スポーツ人類学』で触れている1つの脈絡を端的に示したのが、「貧しい国からのアスリート移民にとって、スポーツは給料勤めであり、家族への扶養義務の実現であり、資源の乏しい国への富の流入を意味している」(『スポーツ人類学』, p.388)と書いてあるところです。こういうアスリートのトランスナショナルな移動です。

それからもう一つ、窪田さんの本を読んで思ったのは、上からだけでなく下からトランスナショナリズムを窪田さんは見出しているのではないかなと。実際、下からのトランスナショナリズムと書いてあるのですが、こういう視点も含めて、この下からのトランスナショナリズムということが、どうも『スポーツ人類学』の方にはあまり書いてない視点かなと思います。どちらかというと上からのトランスナショナリズムに触れてあると思ったのですが、この点でいかがでしょうか。

【窪田】: ありがとうございます。今、ご指摘いただいた点については『スポーツ人類学』の388ページに書かれています。そこではトンガから日本に渡ったプロラグビー選手が故郷に残してきた家族に送金をしているという事例が紹介されていますが、それを今、永木先生は窪田がいう下からのグローバリゼーションとどう関わっているのかというご質問だと思います。これは永木先生もエピローグについても触れていただいています、エピローグの構成がグローバルな視点とローカルな視点の双方から迫っているのだということが書かれています。そのエピローグに書かれているエピソードというのは、グローバル企業の事例がまず示され、一方でフィジー出身のラグビー選手がフランスに渡って最終的には自殺をすることになるというものでした。この『スポーツ人類学』は、何か一つの地域に特化した民族誌ではなく、概説書だといえます。あまり深く一つ一つの事例を掘り下げるのではなく、こういう視点あるいはこういう方法というのが大事なのではないかということを示していて、私としては違和感なく読めました。

【永木】: そうですか。はい。私はどちらかというと窪田さん流にいうと、窪田さんが実際

にドミニカ共和国の「ペロータ (野球)」についてフィールドワークをされて、その時に「ヘゲモニー」じゃないですけど、いわゆるお金をお金の為だけに稼げるに行くというような、そういうトランスナショナリズムだけではなくて、十分にペロータを楽しんで完全に受容した上でそういうトランスしているんだ。というようなところを強調したいというところが、おありなのかな、ということでお尋ねしたんですけど。

【窪田】: もちろん一つのテーマ、対象を設定して本を出版するとなれば、詳細に描くことが出来ますよね。そういう意味では概説書の限界という点はあるのかもしれませんが。一方、自著の『「野球移民」を生み出す人びと』という本では、ドミニカ共和国の野球選手たちがアメリカに渡るのは、貧困から逃れるためという見方だけでは捉えられない側面もあるという点を強調したかったんですね。それは、冒頭で永木先生がおっしゃった、社会学とのすみ分けというところにも関わってくると思うんですね。社会学的な観点からいけば貧困からの脱却というところで話が終わっても問題ないのかもしれませんが。そういう社会の構造、経済の構造を批判的に検討するという目的があるわけですから。一方で人類学的な関心からすれば、同じように見える現象ではあるけれど、その現象を通してドミニカの社会を明らかにしたいというのはあったんですね。ですから貧困からの脱却というストーリーでは捉えきれない部分をフィールドワークの過程で感じとったから、下からのトランスナショナリズムという視点にたどり着いたというのが正確かもしれません。

【永木】: ありがとうございます。ベズニエさんは窪田さんの書かれた本『「野球移民」を生み出す人びと』というか、研究をご存じなんですか？

【窪田】: 2年前にシンポジウムのために来日された際に、2日くらいお話しする機会がありましたので研究内容については知っていただいていると思うのですが、この本を書かれる前は知らなかったと思います。

【永木】: はい。わかりました。ありがとうございます。そういうことを踏まえた上で、少し大きな話になるんですけど、トランスナショナリズムということで、ある種の政治学、政治経済の側面から見ていくと、スポーツ選手のトランスナショナリズム自体が世界的にストップしていくのではないかと、抑圧されていくのではないかと、個人的には感じるんですね。〔それとは逆で〕いやいや、「スポーツ移民」が持つ力は政治学とかそういうものには求められないんだ。例えば、ローカルなアスリートたちがメジャーなところにどんどん動いていくっていう現象はアメリカが極端に移民を排除する、これ以上〔移民を〕入れないという政策をしても、それを破っていく力を持つのかという、その辺に関してコメントをいただければなど。

【窪田】: これについては、私の意見を述べるよりも『スポーツ人類学』の本から引用する方がいいかもしれません。第7章の353ページに、アメリカがトップアスリートを集めるために特別にビザの発給要件を緩和するような枠を作ってオリンピックとか国際大会でのスポーツでの覇権を誇示しようとしている事例がでてきます。そこでは、アメリカ陸軍がオリンピックの候補者を求めて世界クラスのアスリートを募集する、ワールドクラス・アスリート・プログラムを提供していて、そのプログラムに採用されたアスリート、つまりアメリカ生まれではない入隊者は通常の5年間居住の原則を適用されずにアメリカの市民権を申請することができるそうです。永木先生がおっしゃったように、一般の労働移民に対する規制や排除が強化されることはあり得るのかもしれないかもしれませんが、アメリカやイギリスで反移民感情が高まっている中でも、スポーツ選手に対する排除はあまり進まないのかなと思います。これもオリンピックやメガイイベントを対象にする面白さではないかとベズニエさんだったら言うのかなと予測をしてお答えさせていただきました。

【永木】: はい。ありがとうございます。尾川さん、まだ時間は大丈夫なんですか？

【司会】: そうですね、進めていただければと思います。

【永木】: なら簡単に。第7章のところで触れたいことがあったんですけど、これは私個人のこだわりみたいなのがありまして。第7章はですね、「スポーツ、ネイション、ナショナリズム」っていうことなんですけど、そこに関して1つ全部を読んでいて気になったことは、特に「ナショナリズム」の理論っていうものに「近代主義」か「歴史主義」か、その2つがあると思うんですよね。

近代主義っていうのは、近代工業社会の特徴を重視する立場で、それより以前の時代の文化様態との断絶を前提にする傾向にあるのかなと思います。これは吉野耕作さんが25年も前に分析されて言われています⁴⁵⁾。それでベズニエさんらは、ホブズボウムとかアンダーソンを多く引用されていますので、近代主義という立場で書かれている。最終的には現代の問題を多く取り上げているので、どちらかというところそういう立場で見ていると思います。

そうすると第1章、第2章の話にもあったんですけど、〔問題なのは〕文化の連続性といえますか、近代よりも以前のもの〔との連続性〕です。そういった〔前近代と近代以降の〕ものをどのようにして繋いでいくのか、その説明不足が研究上起こってこないか、少し気になることがあります。ただ、このエピローグの部分です。ベズニエさんも『スポーツ人類学』の〕本の中で「言い換えれば、スポーツは現代人類学における一見異なる二つのアプローチを接合する助けとなる。そのアプローチとは、ローカルに密着した個別具体的な民族誌と、トランスナショナルな流れやグローバルな政治経済、そして社会や文化の動態的な側面を描き出そうとする人類学である」〔『スポーツ人類学』, p.409〕としていて、異なっている感じがします。しかし、「一見異なる二つのアプローチ」が本当にうまく接合できるのかなというところなんです。

これは、石井昌幸先生の〔事前の〕メモで、そういったところが少し浮かんでいたかなという気がしないでもないですけど。私はどちらかというところ「歴史主義」といえますか、〔前近代と近代以降は〕ずっと繋がってきているという前提に立ちたい方なので、そこについて、もう少し掘り下げて説明していただくと良かったのかなと、あるいは改めて機会があれば説明を求めてみたいという気がしないでもないですね。

この問題はさっきも言ったように、方法論的にも社会学との違いにも繋がるのではないかと感じています。ただあまり古いことを引きずってずっと書いていくとなると、それは人類学ではなくて歴史学ではないかということになるかもしれないですけど。この辺のところ少し気になったということがあります。

【窪田】: 文化の連続性という点に関するベズニエさんのポジショナリティについてですが、今、永木先生が引用されたところ書いていることは、歴史の連続性とか断絶性という話というよりは、違う意味での歴史性の話かなと思うんですね。というのは、永木先生が引用された「2つのアプローチを接合するとか、ローカルに密着した個別具体的な民族誌とトランスナショナルなグローバルな政治経済、社会や動態的な側面を描きだす」というところがポイントになってくると思います。かつての人類学者がフィールドの現実を非歴史的に描いてきたとして、1980年代に批判されることになりました。永木先生のご指摘から少しずれるのかもしれませんが、そういう意味では非歴史的だったわけです。人類学者が調査地域の文化を切り取って民族誌として提示してきたことへの反省が人類学のなかで生まれるのですが、同時に、現実の社会もまた急激に変化をしていきます。新自由主義的なものが世界中を席巻するようになったことが大きな要因ですが、人類学者がフィールドワークで訪れる社会もそうした変化と無縁ではいられなくなりました。そこで生きている人たちの実態を描き出そうとすると、トランスナショナルな現代世界の文脈にその現地の人たちが絡み取られているわけですから、必然的にそれをそのまま描き出さないといけなくなることになります。それが動態的であると。

繰り返しになりますが、これまでの描き方は非歴史的だったわけです。そういう意味では現在の描き方っていうのは歴史的〔社会的〕な文脈を踏まえた書き方に変化しているということは言えます。

【永木】: おっしゃることはわかります。動態的に捉えていくっていうことが凄く大事だということは理論上理解しているつもりです。どうもですね、ホブズボウムあたりが言っていることは、いってみればその時の文化の状態にある解釈を与えていくと、全てがその連続だよっていうことについて理解は私もできるんですけど、あまりにも捏造だというような表現で切ってしまうと、ホブズボウムが全部そうやっているという意味ではなくて、変に「伝統の創造」というのを取り込むと、全部そこで捏造とか、何でもかんでもでっち上げじゃないかっていう形で終わらせてしまうと、前近代とか、もっと昔だとか、そういったものからの連続性を凄く否定してしまう。それは個別の例によって相当違うと思うんですね。決して本質主義に立つということではないんですけども、やはり連続性っていう歴史の深さっていうんですかね。そういったものも、一方ではケースによっては非常に大事にしなければいけないんじゃないかと。そうしないと十分な説明はできないじゃないかと。そういう意味での提示の仕方だけなんですけどね。

【窪田】: おっしゃっていることはよくわかります。ホブズボウムの言っていることはあまりにも構築主義的ですから。さきほど、少し違うかもしれないと前置きをしましたが、フィールドがおかれている歴史性というのは、永木先生がおっしゃった前近代を含めた歴史性だという意味ではおっしゃる通りだと思います。

【永木】: はい。ありがとうございます。とりあえずこういうところで。

【司会】: はい。ありがとうございます。7章と8章についていかがでしょうか。

【窪田】: 1つよろしいでしょうか。事前に送っていただいた永木先生のペーパーで時間の都合で割愛されたと思うのですが、最後の方に、これは第3セクションでも川島先生から話があったところですが、「スポーツ研究に人類学の概念を応用することと、スポーツというレンズを通して人類学の対象を理解しようと試みることの明確な違いは、現代の学問としての人類学の特徴を際立たせる」〔『スポーツ人類学』, p.410〕というところを引用されたうえで、非常に示唆的であり、自身の研究では目指しているのだと書かれているのは、今日の全体的な話に関わってくると思いますので私から紹介させていただきました。

【永木】: ありがとうございます。

【川島】: 永木先生のプリントで嘉納治五郎の話もされていたと思ったんですが、その話も非常に興味深く、今回はやはり割愛されたということだったんでしょうか。非常に興味深く、もう少し掘り下げてほしいと個人的には思ったんですが、何か言い残したことがあったらコメントいただきたいと思いました。

【永木】: はい。『スポーツ人類学』の本の中でも、最初の序文のところで、「西洋人は柔道をしばしば日本の『伝統的』スポーツとみなしてきたが、実際には創られた伝統である。その創始者嘉納治五郎は、伝統的な武道の技と近代的な体育の原理を組み合わせることで柔道を創り上げた」〔『スポーツ人類学』, pp.10-11〕というふうに書いてありました。これは間違いではないですけども、これが、先ほどにも出ているようにホブズボウムの「創られた伝統」というところに依拠した捉え方だなと個人的には思いました。実際に、その嘉納治五郎の柔道っていうものをみますと、柔道の勝負の理論、技術の理論ですね。「柔よく剛を制す」だとか。それから思想ですよ。儒教徳育主義とかがかなり強い。それから家元的な組織があるとか。そういった部分はかなり江戸時代のものを踏襲しているというふうな捉えられる。単純にいうと柔道が“JUDO”に創造されたとよく言いますが、それは嘉納亡き後の世界大戦後であると。これは極端かもしれませんが、私が思っていることです。そこら辺のところでは先ほどの話の1つの例としてこれを出そうかなとは思ってはいたんで

すけど。そういうところでよろしいでしょうか。

【川島】: はい。第7章のところでベズニエさんが、336 ページのところで、「究極的には、すべての伝統が創られたものである、そしてこの点がホブズボームの用語における「創られた」という形容詞の有用性への批判につながっている」『スポーツ人類学』p.336, っていうような話をしています。ここはおそらく著者によるホブズボーム批判ではないかと思うんですが、先生のコメントで創られたっていうところにも、いくつかのレベルというか、違いがあるというか。そういうことなのかなというふうに私はこの原稿を読んで思っただんですが、そういうことではないですか。

【永木】: そういうことが言いたいんです。その通りです。最後のとこに書いてありますように創られたといえれば全てが「創られた」といえるわけなんですけども。時代や社会環境に応じて変容するということと、でっち上げられるということは、区別されないといけないんじゃないかと個人的には思っています。

【川島】: はい。了解しました。そこのところが大事だということで。同感です。

【石井 (昌)】: ちょっとよろしいでしょうか。ホブズボームの「創られた伝統 (invention of tradition)」というのは、もともとイギリスで最初に話題になったときには、トレヴァー・ローパーという人とホブズボームが共著で論文集を出したことで話題になった本です。それは、トレヴァー・ローパーはどちらかといえば右派の論客、ホブズボームは左派の論客。論敵だったんですけど、2 人が合同で近代国家論を出したということで話題になったと。

その後「創られた伝統」という言葉だけが色んな分野に吸収されて、あたかも理論や概念であるかのように使われ始めたっていうことで、歴史学のなかでは「それは違うんじゃないか」っておそらく言われているんじゃないか、と思って。ホブズボームはたんに近代国民国家論のなかで天皇制みたいなものが古〔いにしえ〕からの伝統と言われているんだけど、それは逆に近代国家そのものが「古からの伝統」というものを必要としているのだ、ということのをローパーもホブズボームも同意したということに過ぎない、というふうに私は理解していて。これをほかのものに援用して「創られた伝統」に当てはまるのか、当てはまらないのかっていう議論は私としてはあまりピンとこないんですよ。これはあくまで近代国民国家のツールのひとつとして伝統というものがしばしば活用された、っていう話だと私は理解してたんですけど。

【永木】: 私がこだわっているのは大元のホブズボーム自体がどういうふうに捉えたのかというところよりも、その後「インベンション・トラディション」が流行って、何でもかんでも「創られた伝統」だという指摘が凄く多く出てきて、柔道も創られた伝統だというレッテルを貼られたというところに私は引かかる、こだわってる、そういうことなんです。

【石井 (昌)】: そういう意味でいうなら、ぼくは柔道は「創られた伝統」に当てはまるんだと思うんですよ。近代国民国家のなかで必要とされた「伝統」の一類型だとすれば、そうなんじゃないかと思うんですよ。だから学校体育に入るんじゃないかなということ、私はその説明には何ら違和感はないんですけど。むしろ「ほんらい柔道はそういうものではなかった」式の議論のほうが、伝統主義にものすごく加担していると思うんですけど。

【永木】: そういったときに、今ここでは引き合いに出しませんけども、例えば井上俊さんの本⁴⁹⁾が 20 年くらい前に出てきたんですけど。その中で〔嘉納の柔道の〕近代化されたという部分だけに光を当てている。そういったところは少し偏っているんじゃないかなと個人的には思います。

【石井 (昌)】: ただ私は、スポーツ研究者の一人として主張しておきたいことは、ベズニエさんの本にも共通すると思うんですけど、スポーツ研究者の側であまりにディテールに

突っ込んで「それは言えない」式の議論をいくら集めてみても、結局、井上俊が言ってることとかニコ・ベズニエの言ってることに勝てないと思うんですよね。その強みっていうのは、誰しもが「ああそう言われればそうだな」と思う一般的な説明が組み立てられているっていうことだと思うんですよ。

それがこの本の最大の強みだから訳すべきだと思ったし、いくらこれを一個一個取り上げてディテールで反発してもみても、そのディテールの集積が、この全体像を超えられない、っていうことだと思うんですよ。これは井上俊さんの本を読んだときも同じように感じまして。寒川先生も凄く批判してるのを聞いたけど、素人のぼくが聞くと〔批判のほう〕ピンとこないんですよね。井上さんの言っていることのほうが「ああそうだな」って。よっぽどそうだなって思って。ここをどうクリアにするのか。専門家のディテールが、ディテールとして正しかったとしても、非専門家の言っている一般論に勝てないんだったら意味がないと思うんですよね。

【永木】: 最初に言ったように、全てを否定しているわけでもないんですよね。確かにそうだなと思われる部分もあるんだけど、私のこだわりですね。この点は特に。

【石井 (昌)】: ただ、こういうふうにあえて申し上げるのは、結構多くの武道研究に同じような空気感を感じるんですよね。そのことがたんなる体育研究なのか、それともそれを超えて、超えてという言い方がいいかわからないけど。さっきからずっと議論になっていることで、これは人文系とか社会科学系のもっと普遍性のある議論に昇華できるのか、っていうところが大きなポイントだと思ってまして。

武道研究の方に私も知り合い多いですけど、読んでいて同じような問題を感じるのは、そこなんですよ。武道家とか武道研究者とか武道好きのなかでは、これはたぶん通用する議論なんだろうけど。そして、「そうだよね、一般的に言われてることとは、本当は違うよね」ってところでみんなが納得するのかもしれないけど。でも、武道に全然興味がなくてやったこともない私が読んで、さっぱり分からないんですよね。何を言っているのか。ここの壁をどうやってクリアする気なのかな、っていうのが武道研究に対する僕のなかでの疑問であり、違和感であるということですね。いいんですよ。武道のなかだけで、それでよければね。

【永木】: 最初にここに入る前に申し上げたように、一つには私は歴史の連続性にこだわる方であり、文化を理解するときに、そういう立場から見るときにこれはどうなのかっていう話をしたかった。また、武道研究については機会がありましたらお話しさせていただきたいと思います⁴⁷⁾。

【司会】: よろしいでしょうか。では7章8章については以上とさせていただきます。

総合討論

【司会】: では、最後の総合討論に入っていきたいと思います。よろしくお願いします。

本日の議論の中でいくつかポイントが出ていたと思います。最後は少し大きな話ができればと思っています。石井昌幸先生からこの合評会にあたっての「研究ノート」をお寄せいただいております。それに基づいて私のほうで〔論点を〕まとめたものをご用意してみました。それを紹介したのち、最後の総合討論に移っていければと思います。また別の機会への持ち越しの部分もあると思いますが、よろしくお願いします。

1 つ目に本書の意義として、本日の議論でもいくつか出てきていると思いますが、スポーツ研究を通じて現代世界が抱える諸問題を理解するとともに、文化人類学の理論と方法にインパクトを与えるという意味で、これは「文化人類学の本」といったところが今日の話で出ていたと思います。

関連して2つ目に、もちろん、『『スポーツ人類学』では] ベズニエ先生たちの意図としては概説書ということもあるので、微視的な事例を人類学の方法論に沿って掘り下げるといっても、世界各地のスポーツのエスノグラフィーを用いて、現代のスポーツをめぐる動きがグローバルなスポーツシステムと結びついていることを理論的に示すといったところが本書の意義かなと思います。これに関連して、ベズニエ先生の近著、*Sport, Migration, and Gender in the Neoliberal age*⁴⁸⁾といったタイトルの本も刊行されています。

3つ目としては、『『スポーツ人類学』では] スポーツ史やスポーツ社会学が提示してきた古代から現代に至るスポーツの像を、西洋はもとより5大陸を網羅しながら人類学の思考に基づいて再考していることが挙げられます。スポーツ人類学から想起される「民族スポーツ」や「伝統スポーツ」だけではなく、「近代スポーツ」、特に、プロスポーツやメガスポーツイベントの事例が豊富といったところが挙げられると思います。この点については、事前に石井隆憲先生と石井昌幸先生のノートの中で、「民族スポーツ」概念というカテゴリーを設けるのは問題があるのではないかということから、失効、または刷新する必要があるのではないかという議論が出ていたと思いますし、[本日の議論で]そこに川島先生も意見をお寄せいただいたと思います。

4つ目として、『『スポーツ人類学』では] 新自由主義が世界を覆う現代世界において、スポーツ選手の経験を人類学的に解説しているということと、本日はあまり時間を取れませんでした。窪田先生はアラン・クライン⁴⁹⁾の一連研究を批判的にフォローしていらっしゃるというのがございましたし、ベズニエ先生の著書でもアラン・クラインの一連のエスノグラフィーを高く評価しているということもあります。

5つ目として少し大きな話になりますが、ベズニエ先生たちの『『スポーツ人類学』が出版されたことで、これに対して日本のスポーツ人類学がどのように応戦していくのかが、昌幸先生からの問題提起として出されていたと思います。そこで、今まで日本のスポーツ人類学においてさまざまな活動をされてきた寒川先生の人類学と、ベズニエ先生の人類学を、どのように引き取るのかということが今後考えていかなければならない部分になるのではないかと思います。

6つ目として、新自由主義時代におけるスポーツ人類学の展望ということで、対象なり方法なりをどのように刷新していくのか、それとも据え置きのままなのか、こうしたところを1つの論点として、マルチ・サイテッド・エスノグラフィーという方法が挙げられていたと思います。日本のスポーツ人類学やアメリカのスポーツ人類学で参照されるものであれば、ギアツの闘鶏⁵⁰⁾が一番読まれてきたであろうし、その後いくつか続くようなものもあるかと思いますが、明確に学説史として成立するような研究の蓄積というのがなかなか難しいという部分もあるかと思います。

7つ目として、ベズニエ先生たちの、『『スポーツ人類学』においては、身体や動きといった部分が欠けているのではないかと思います。その部分に関しては、かつてはマルセル・モースが「身体技法」という概念を打ち出していますので、そうしたところを今後どのように詰めていけるかということもポイントなのかと思います。

8つ目として、私は、医療人類学、教育人類学、開発人類学など、そういった応用人類学というものをスポーツ人類学から展開していく可能性があるのではないかなとも考えております。

最後に、80年代のいわゆる「ライティング・カルチャー・ショック」や、近年の人類学の潮流である「存在論的転回」に対して応答する必要性もあると思います。こういったものは日本のスポーツ人類学が、今後向き合っていくものではないかと考えています。大きな問いとして、昌幸先生からご提示いただいたものを参考にしながら簡単にまとめたところです。[大きな問いばかりなので] 総合討論ではこのような話をする時間が足りない

と思いますが、いかがかなと思います。それでは、このあたりのことについてご意見をいただければと考えております。いかがでしょうか。

【相原】：相原と申します。よろしく申し上げます。私は尾川さんと似たような疑問を持っています。スポーツ人類学会にベズニエ先生が来られたときに、なぜ「オントロジカルターン（存在論的転回）」への言及がないのか」ということを懇親会で直接聞いたら、「あまりあれは好きではない」というふうにおっしゃって。「では、そう言われたら仕方がないですね」といった感じで話が終わったのですけれども、そういった意味では、この本は概説書という位置づけではないような気がします。尾川先生が冒頭で概説書という言葉が使われましたけれども、私としては、この本は、スポーツの人類学の見方を豊かにする1冊であるという、少しアドバンストな本だと考えておりました。訳者の方々は概説書として触れていらっしゃるのかということ、少しだけ確認していただけるとありがたいです。

【司会】：先生方、いかがでしょうか。

【石井（昌）】：私は概説書と考えていました。「概説書」をどうとらえるかということですね。たとえば、私のざっくりとした考えでは、歴史でいうと、先ほどご紹介した *Sport and the British* という本は概説書であると考えています。それから、もう少し前に出版された、トニー・メイソン (Tony Mason) という方が書かれた、*Association Football and English Society*⁵¹⁾、これは典型的なモノグラフです。細部まで資料を分析して、とても細かい工程を経て書かれています。この両方ともが、イギリスのスポーツ史学会では「クラシック」と言われていて、高い評価を受けています。そういった位置づけをするなら、片方が概説書で片方が研究書であります、同じように高い評価を受けています。

ですから、私の感覚では、スポーツ人類学で言えば、この『スポーツ人類学』は概説書という位置づけになるであろうと認識しています。たとえば、ジョセフ・オルターという人のレスリングのモノグラフ⁵²⁾があるのですが、あれは完全に1ヶ所に入り込んでレスラーの研究をしたモノグラフなので、概説書ではないと考えられます。そういったことから、『スポーツ人類学』は概説書であると思っていたのですが、違いますでしょうか？もちろん、概説書であってもアドバンスなものはあります。『スポーツ人類学』の章立ては全くもってジェネラルですし、これを概説書と呼べない理由がよく分かりません。

【相原】：入門書の次に読む本といった位置付けでしょうか。

【石井（昌）】：概説書、という呼び方が良くなかったのかもしれませんが。ただ、『スポーツ人類学』は、明らかに、「縦に深く」ではなく「横に広い」章立てですよね。先ほどノートにも書かせていただきましたが、たとえば、大学4年生で卒業論文を書こうとしている方が、スポーツを専門としていなくても、歴史学なり、人類学なりをやっている方がスポーツをテーマにしたいと思ったときに、これを見ていただければどんなテーマが可能かをざっと確認することができます。たとえば院生で、文化人類学出身でスポーツ系の研究会に入っている人が、どういったことをテーマにしようかと考えたときに、これを見るとテーマ選びができるという意味では、概説書であると思っていたのですが。先ほど挙げましたジョセフ・オルターの本を読んだとしても、テーマの広さというのは分からないと思います。

【相原】：ありがとうございます。

【司会】：ありがとうございます。では、本日の研究会は以上とさせていただきます。予定時間をオーバーするほど議論が膨らんでいますので、また、続きとなる会を開催できればとも思っています。長時間、ありがとうございました。

註・引用および参考文献

- 1) その他にも以下のような記述がある。

「スポーツの研究が現代の人類学と人々の生活の主だった関心に多大な貢献をする」
『スポーツ人類学』, p.9]

「グローバリゼーションは、スポーツの世界で新たな帝国主義を生み出している。なぜなら、オリンピック競技となり、その結果として西洋が支配するグローバルなスポーツのシステムに組み込まれたスポーツが、資金提供を受け世間の関心を集める一方、他のスポーツは苦境に立たされ、衰退する可能性があるからである」『スポーツ人類学』, p.10]

つまり、スポーツのグローバリゼーション自体が西洋中心主義であるということだ。

「一般的にスポーツは、余暇として、娯楽として、個人的に楽しむものとして考えられているが、実際は、人が人生をいかに組み立てるか、あるいは社会がいかに機能するかのような重要かつ広く応用できる問題を提起する。スポーツは、人々の生活の私的側面から全世界を一つにするメガイベントまでのさまざまなレベルで機能するので、人々の生活がグローバルなプロセスにいかに織り込まれるかを理解するためのとても豊かなフィールドである。日本であれ世界のどこであれ、人類学的な理論と方法のレンズを通してスポーツを分析することは、こうした大きな問題を明らかにする際の手助けとなる」
『スポーツ人類学』, p.13 ; 帯]

- 2) また、以下のようにも記述されている。

「スポーツの、とりわけ興味をそそる側面は、遊びと真面目、余暇と労働、個人主義と集団主義、楽しみと暴力、ヒエラルキーと平等、道徳と腐敗などのように、他の場合なら矛盾すると考えられるような経験を融合させてしまう点にある。これらの対立は、世界のまったく異なった場所や、歴史上の根本的に違う時代のなかになら明確な予測可能性をもって見つけられる」『スポーツ人類学』, pp.16-17] ここからは、西洋由来の形而上学的な二項対立を無効にするのがスポーツであると読み取れる。

「チェスや闘鶏やビデオゲームやボディビルが「本当に」スポーツかどうかをめぐる議論に腐心するよりも、最終的にそのなかのいくつかが「スポーツ」と分類されるところへ向かい、別のものは除外されるという西洋中心主義的歴史過程に注意を払いながら、我々は自分たちの分析において、身体を使った運動や競争的な活動に関する幅広いスペクトルを視野に入れていくことのほうが生産的だと気づくのである」[『スポーツ人類学』, p.22]

「我々は一般的に、スポーツの非常に広い定義を採って、何がそれをほかの日常的な活動から分かつか、それは当該の土地でどのように特徴づけられているのか、それは他の人々にはどのように理解されているのか、それは国際的に「スポーツ」と認識されているメインストリームの活動に対して、どのような位置を占めているのかなどの点に特に注意を払う」[『スポーツ人類学』, p.22]

- 3) 発言者のいう「西洋」は、ヨーロッパと北アメリカをイメージしている。
4) ケンダール・ブランチャード、アリス・タイラー・チェスカ：大林太良監，寒川恒夫訳（1988）スポーツ人類学入門．大修館書店：東京。
5) 寒川恒夫編（2004）教養としてのスポーツ人類学．大修館書店：東京
6) 石井隆憲編（2004）スポーツ人類学．明和出版：東京。
7) 寒川恒夫編（2017）よくわかるスポーツ人類学．ミネルヴァ書房：京都。
8) 原著には3章「スポーツ人類学：理論と方法」、7章「スポーツ人類学：応用」、8章

「現代の諸問題とスポーツ人類学」の章があるが、日本語版ではこれらの章は割愛されている。

9) 「日本語版への序文」のなかでは、以下のように書かれていた。

「(スポーツは一引用者注) 要するに、遠く離れたトレーニング場にいるアスリートの身体から始まって、競技のためにいくつもの国境を越えたり、より良い環境のトレーニング・センターへと移住したりする彼らを追いかけ、最終的にグローバルな政治経済学のど真ん中へと行き着くような、権力のたどった道を跡づけることが可能なのである。ミシェル・フーコーは、権力のこうした多形的な性質を捉えるのに「生・権力」という術語を用いた。それは、国家という範囲にとどまらず、階級、ジェンダー、エスニシティ、その他の種類の権力の差異へと流れ込み、最終的には日常的な身体的実践にまで浸透するものなのである。「生・政治」は、生・権力の政治学、すなわち、家族、健康、性、誕生、死などの統制を通した身体のコントロールを言ったものである。我々はこれらに、スポーツと運動を加えてよい。本書の副題〔原題〕を「身体、境界、生・政治」としたのは、社会的段階を横断する、スポーツのこの許容性のゆえなのである」〔『スポーツ人類学』, pp.24-25〕

10) 関連して以下のような記述がある。

「第一回近代オリンピック大会が、古典人文教育を受けた貴族ピエール・ド・クーベルタンに率いられて一八九六年に創設されたのは、新古典主義（ここでは考古学が決定的な役割を果たしたが）という、より広い文脈のなかにおいてであった。続く二十年間、オリンピックは数多くのスポーツにとって最初の世界大会となり、近代スポーツと民主主義、そして西洋の植民地主義的・帝国主義的覇権との結びつきを固めたのであった」〔『スポーツ人類学』, p.35〕

「スポーツという分野においては、過去は現在にとりわけ重くのしかかる。さまざまな種類のスポーツ実践を正当化するのに、歴史が用いられてきたからである。これらの正当化のプロセスは、特定の歴史叙述を構築することが、世界の特定の地域の他の地域に対する権力を正当化するのに役立つという大規模な力学の一部であった」〔『スポーツ人類学』, p.35〕

「現代と同じく古代においても、「スポーツ文化は征服と帝国のみならず、交易と植民によって伝播した」のである」〔『スポーツ人類学』, p.37〕

11) 邦訳に、ヴォルフガング・デッカー：津山拓也訳（1995）古代エジプトの遊びとスポーツ。法政大学出版局：東京がある。

12) 象徴的なのはバヌアツ、ペンテコスト島のバンジージャンプである。観光化され、消費され、そしてエンターテイメント〔遊園地のアトラクションなど〕になった。その過程で、本来の意味は失われている。

13) 私自身は1980年代後半以降、「民族スポーツ」の発見は、メディアによって消費し尽くされたのではないかと思います。結果「民族スポーツ」は消失の危機に陥り、「観光」を看板にお金を動かし〔マネジメント〕、保存することになったのではないのでしょうか。

「民族スポーツ」を保存しなければ、「民族スポーツ」を中心としたスポーツ人類学は、研究対象を失ってしまうからです。

14) 人類学の消費という観点は、以下の部分にも表れている。

「ワイルド・ウェスト・ショーは、それがなければ居留区に縛られていたであろう多くの「ショー・インディアン」に職を与えた。彼らは合衆国とヨーロッパで大人気となり、アメリカの国民アイデンティティの重要な要素となっていく想像上のカウボーイとインディアンの過去が創り出される手助けをした」〔『スポーツ人類学』, p.43〕

「……非インディアンのなかにも、明らかに架空のインディアン像に愛着を持つもの

がいる」『スポーツ人類学』, p.43]

北米の歴史を発掘し、それを加工し、消費してきたのである。

- 15) 関連して以下のような記述がある。

「西洋の植民地主義・帝国主義との結びつきの名残りとして、近代スポーツの発展に関する一般向けの歴史叙述のほとんどは、古代のスポーツ形態から近代スポーツへの必然的な進歩を証明する、という近代についての支配的な語りを、そのまま踏襲していたとは言わないまでも、おおよそなぞるものであった。このイデオロギー的な結びつきは、当時のスポーツの価値観や組織や構造そのものを反映したものではなく、研究者自身が生きている時代の人間観と世界と文明についての信条を映し出したものであった」

『スポーツ人類学』, p.50]

「ローマのスポーツについて再考することは、近代スポーツについて考えるための多くの糧を与えてくれる。あまりにも多くの要素が、恐ろしく親近感のあるものだ」『スポーツ人類学』, p.56]

- 16) 関連して以下のような記述がある。

「古代文化にもスポーツがあったことを示す証拠がふんだんにあることは、身体的活動としてのスポーツ（文化的概念としてではなく）が、近代の発明でも、西洋文明の発明ですらないことを証明している。だが、だからといってスポーツは人類に普遍的だというわけでもない。なぜなら、それが行われる特定の歴史的、社会的、政治的文脈によって明らかに多様だからだ。」『スポーツ人類学』, p.57]

「遊びというものは、生活の他の文脈から派生した一連の行動であり、本質的に生物学的な必要条件であると見えてくる。遊びは、若者が生き残りに必要な必須のスキルと知識を、それを通して学ぶという点で適応的なものであり、ある社会集団において、成員が成長する際に、その集団とのつながりを維持するのに役立つ。このように遊びは生物学的に重要なのであるが、同時に、生物学的なものと文化的なものとの絡まりあう人間生活の一側面でもある。人はなぜ遊ぶ——さらにはゲームをしたりスポーツをしたりする——のかという問いは、たんなる生物学的必要性のあらわれというよりも、はるかに複雑な問題なのである」『スポーツ人類学』, p.58]

「遊びが自由であること、毎日の生活のなかでカッコで括られたものであること、そして、物質的な関心から独立していることは、遊びが、近代資本主義社会において重要とされているありとあらゆるものと正反対であるように思わせる。「現実逃避」を与えてくれるものとしての遊びの力は、余暇を基盤とした近代性のなかの個々人は、「自由に」遊べるという考えに基づいている。しかしながら、余暇を「賢く」過ごさねばならないという義務は、人類に普遍的なわけではなく、資本主義に根差した特殊な文化規範なのである。にもかかわらず、ホイジンガは遊びと労働とを明確に区別し、近代スポーツは遊びではないとした。産業資本主義に根を持ち、そのために物質的な関心に巻き込まれているからである。近代スポーツにおける画一化とシステム化は、スポーツを遊びという性質から遠ざけてきた」『スポーツ人類学』, p.63]

- 17) アレン・グットマンは、近代スポーツの特徴として、「世俗性」「平等性」「官僚化」「専門化」「合理化」「数量化」「記録への固執」の七つをあげている（アレン・グットマン：石井昌幸ほか訳（1997）スポーツと帝国—近代スポーツと文化帝国主義—。昭和堂：京都。pp.3-4）。

- 18) 関連して次のような記述がある。

「一九八〇年代になると人類学者は、この専門分野の黎明期から非常に重要であった、人類を集団ごとに区分するための科学的カテゴリに批判の目を向けるようになった。代表的なのは、「文明」と「野蛮」、「伝統」と「近代」、「原始的なもの」と「進歩したもの」

といった区別である。そうした対置は、帝国主義や植民地主義という文脈においてとりわけ顕著であり、この二つの概念は密接に関係している」『スポーツ人類学』, p.78]

19) 関連して以下のような記述がある。

「ポストコロニアル研究は、現代社会がすでに脱植民地化を経験したと思われるなかであって、いまなお続く植民地主義のネガティブな遺産に焦点をあてる研究分野である。とりわけポストコロニアル研究は、西洋が世界の人々を発展させてきたのだという認識について、そう思われていたような客観性を持たないことを証明しようとする。むしろそうした認識は、帝国主義と植民地主義を正当化し、促進するための関心と結びついた諸制度によって創り出されてきた」『スポーツ人類学』, p.79]

「ポストコロニアル研究者は、コロニアルなヒエラルキーの再生産に加担する分野であるとして、人類学にとりわけ批判的であった」『スポーツ人類学』, p.79]

「『国民』は、実際には、かつて植民地化された何らかの集団による自己規定に由来するというより、ヨーロッパの理念に由来する観念なのである。スポーツは、近代国民国家と国民アイデンティティ形成のなかで、あらゆる種類の政治的立場を表現した」『スポーツ人類学』, p.81]

20) 関連して以下のような記述がある。

「スポーツは、帝国主義的、植民地主義的、「文明化的」目的に寄与した。スポーツをすることは、身体的な行為および「文明化された」諸価値と遊びの規範を通じて、植民地化する側の優越性についての目に見える証明を与えた。征服され、植民地化された人々、別の言い方をすれば「文明化されざる」人々（すなわち、非西洋の人々）の反応は、複雑なものであった。コロニアルな文脈におけるスポーツは、最終的に現地の人々を同化させるのに役立った場合もあれば、徹底的に圧倒するのに役立った場合、あるいは植民地化勢力に抵抗し、競い合うのにおおつらえ向きの手段となった場合もあった。抵抗の戦略は、「進化論的により進んだ」権威によって打ち出された理論に少なくとも挑戦したのである」『スポーツ人類学』, pp.88-89]

「参加者と観戦者の数から見た場合、世界中で優勢だと言えるスポーツは、そのすべてが、十九世紀と二十世紀初頭に帝国主義列強が、その力を投影し、非ヨーロッパの人々を植民地化するのに貢献したことが明白な特定のイデオロギーを広めるために用いたスポーツである」『スポーツ人類学』, p.90]

「植民地化された側の人々をスポーツを通じて文明化しようという植民地化した側のロマンティックなプロジェクトには、一つの暗い現実が潜んでいた。有色人種とヨーロッパないしは北アメリカの白人のあいだの競技会は、人種的、文明的な優越の証明の場であると見なされたのである。それは、現代でもあきれるほど続いているトピックである。いくつかの例では、人類学者はそのような不幸な計画の共犯者だった」『スポーツ人類学』, p.98]

「スポーツは、植民地統治の文明化策の一部ではなく、キリスト教布教の副産物であった」『スポーツ人類学』, p.110]

「植民地主義の中心にあるのは権力関係である。しかし、フーコーが言うように、権力は「多形的」である。それは、次のようなことを意味している。すなわち、権力とは、あからさまに行使されたり、ある人や集団が、別の人や集団をはっきりと判るような形で抑圧したりすることばかりではない。むしろ権力はどこにでも作動しているのであり、権力の座にあたり、優位な立場にあたりする側が、権力関係を自覚していないときですら作動しているのである。同様に、抵抗もあらゆる場所で見られる。権力も抵抗も、互いに絶え間ない緊張関係にあり続けるからである。「権力があるところには、抵抗がある。にもかかわらず、あるいはむしろ結果的に、この抵抗は、権力に関する外から見え

るような立場のなかには決してない」。フーコーは我々にそう気づかせるのである。スポーツは、植民地主義への抵抗を実行するための完璧な道具である。なぜなら、スポーツは遠慮がちで、レーダー画面には映らない低いところを潜行するからである。だからスポーツは、目に見える「日常的形態の抵抗」のなかで実践される権力をめぐるミクロ・ポリティクスの好例なのである」『スポーツ人類学』, pp.121-122]

「スポーツは植民地主義の必須の構成要素であった。それゆえ、かつての植民地のほとんどが独立を獲得してから半世紀たっても、今日のグローバルスポーツという形でコロニアリズムの遺産が依然として明白であることは驚くに値しない」『スポーツ人類学』, p.128]

- 21) スポーツの歴史〔スポーツ史〕がスポーツ人類学の基盤にある。だからスポーツ人類学はスポーツの歴史〔スポーツ史〕を軽んじることはできない。
- 22) この言葉は、ポリティカル・コレクトネスにそぐわない表現です〔発言者〕。
- 23) Richard Holt (1989) *Sport and the British: A Modern History*, Oxford: Clarendon Press: Oxford.
- 24) Catholic approach という表現〔およびその前の部分で、ホルト氏が「私はこれから取り上げるスポーツについて、特に定義しない」と言っているという一節〕について、その後、*Sport and the British* を見直してみたが、少なくとも Introduction には、そのような文言は確認できなかった。記憶違いだったようである。
ただし、ここでスポーツの定義をめぐって「アングロ的」云々と話している部分については、“Some Observations on Social History and the Sociology of Sport”と題する *Sport and the British* の appendix, 特に 361 頁の第 2 段落から 362 頁の第 1 段落までを参照されたい。ここでホルト氏は「スポーツの定義という問題」について論じている。そのなかで、「……それゆえスポーツは、単一の本質には還元できない。……単一の現象ではなく、ゆるやかな関連を持った一連の活動 (a set of loosely related activities) であり、時代を通じてその形態や意味は変化する」と述べている。
- 25) シュテファン・ヒューブナー：高嶋航・富田幸祐訳 (2017) スポーツがつくったアジア：筋肉のキリスト教の世界的拡張と創造される近代アジア。一色出版：東京。
- 26) Deborah Lupton (2012) *Medicine as Culture: Illness, Disease and the Body*. (3rd). Sage: London.
- 27) 「グローバル化、コロナ後も加速する」朝日新聞夕刊 2020 年 9 月 9 日。
- 28) ジェイ・コークリー, ピーター・ドネリー：前田和司ほか訳 (2011) 現代スポーツの社会学：課題と共生への道。南窓社：東京 (Jay Coakley and Peter Donnelly (2009) *Sports in Society: Issues and Controversies*. (Second Canadian Edition). McGraw-Hill Ryerson.)
- 29) Noel Dyck and Hans Hognestad (2015) . Anthropological perspectives and the Sociology of Sport. Richard Giulianotti (Ed.) *Routledge Handbook of the Sociology of Sport*. Routledge: London. p.123.
- 30) *Ibid.*, pp.128-129.
- 31) (2020) 現代思想 総特集：ブラック・ライヴズ・マター。青土社：東京, 48 巻 13 号。
- 32) 清水諭編 (2020) 現代スポーツ評論 特集：スポーツと人種問題の現在。創文企画：東京, 43 号。
- 33) 川島浩平 (2012) 人種とスポーツ：黒人は本当に「速く」「強い」のか。中央公論社：東京, p.180.
- 34) 岸政彦 (2020) 距離化——安定層の生活史。岸政彦ほか。地元を生きる：沖縄的共同体の社会学。ナカニシヤ出版：東京, pp.68-69.

- 35) 石岡丈昇 (2020) あとがき. 松村和則ほか編. 白いスタジアムと「生活の論理」ー スポーツ化する社会への警鐘ー. 東北大学出版会: 宮城, p.341.
- 36) 川島浩平 (2019) 強化か緩和か?ー属性による差異とスポーツの関係性をめぐって. 日本スポーツ人類学会第 20 回大会プログラム・抄録集. 日本スポーツ人類学会第 20 回大会事務局: 埼玉. p.9
- 37) 清水諭編 (2015) 現代スポーツ評論 特集: 女性スポーツの現在. 創文企画: 東京, 33 号.
- 38) 松宮智生 (2018) 性を変えたアスリート. 飯田貴子ほか編. よくわかるスポーツとジェンダー. ミネルヴァ書房: 京都, pp.168-169.
- 39) ジェニファー・ダウドナほか: 櫻井祐子訳 (2017) CRISPR (クリスパー) 究極の遺伝子編集技術の発見. 文藝春秋: 東京, p.279.
- 40) Mark Dyreson (2010) Chapter 38: The United States of America. Steven. W. Pope, and John Nauright, *Routledge Companion to Sports History* . Routledge:London. pp.599-623
- 41) アンジェラ・サイニー: 東郷えりか訳 (2020) 科学の人種主義とたたかうー人種概念の起源から最新のゲノム科学までー. 作品社: 東京.
- 42) デイヴィッド・ライク: 日向やよい訳 (2018) 交雑する人類ー古代 DNA が解き明かす新サピエンス史ー. NHK 出版: 東京.
- 43) ポール・ラビノウ: 渡辺政隆訳 (1998) PCR の誕生ーバイオテクノロジーのエスノグラフィー. みすず書房: 東京.
- 44) 窪田暁 (2016) 「野球移民」を生みだす人びとードミニカ共和国とアメリカにまたがる扶養義務のネットワークー. 清水弘文堂書房: 東京.
- 45) 吉野耕作 (1997) 文化ナショナリズムの社会学ー現代日本のアイデンティティの行方ー. 名古屋大学出版会: 愛知.
- 46) 井上俊 (2004) 武道の誕生. 吉川弘文館: 東京.
- 47) 時間の都合上, ここで話は終わりましたが, 少しだけ補足させてください。自身の研究を引き合いに出しているという, まだ未発表でネタばらししたくないところですが, 嘉納は“オリンピックに柔道を加える必要はない”, と IOC 委員を引き受けてから一定の期間が経って述べています。井上俊さん流の“嘉納による柔道の近代化”像に慣れている方々からみれば, それに疑問を持ち「ホントですか?」と思うでしょう。だったらなぜ, 戦後の東京五輪に柔道は採用されたのだ, とか。しかし, この点は点として終わらせるので無く, 実は『スポーツ人類学』でも扱っているナショナリズム, 民族性, 多様性といった比較的大きなテーマに結びつく意味でも重要ではないかと思うわけです。
- 48) Niko Besnier, Domenica Gisella Calabrò, and Daniel Guinness (2021) *Sport, Migration, and Gender in the Neoliberal age*. Routledge:Abingdon.
- 49) Klein Alan M. (1991) *Sugarball: the American game, the Dominican dream*. Yale University Press: New Haven, Conn ; (1993) *Little big men: bodybuilding subculture and gender construction*. State University of New York Press: Albany ; (1997) *Baseball on the border: a tale of two Laredos*. Princeton University Press: Princeton ; (2006) *Growing the game: the globalization of Major League Baseball*. Yale University Press: New Haven ; (2014) *Dominican baseball: new pride, old prejudice*. Temple University Press: Philadelphia.
- 50) クリフォード・ギアーツ: 吉田禎吾ほか訳 (1987) ディープ・プレーバリの闘鶏に関する覚え書き. 文化の解釈学Ⅱ. 岩波書店: 東京, pp.389-461.

- 51) Tony Mason (1980) *Association football and English society, 1863-1915*, Harvester;Humanities Press: Brighton, Sussex , Atlantic Highlands, New Jersey.
- 52) Joseph S. Alter (1997) *The Wrestler's Body: Identity and Ideology in Northern India*, Munshiran Manoharlal Publishers Ptv. Ltd.: New Delhi.